

小笠町川上地内

宮ノ前遺跡発掘調査報告書

1990

静岡県小笠郡小笠町教育委員会

序 文

当、小笠町は、町の活性化を図るため、積極的に企業誘致をしています。この宮ノ前遺跡も企業誘致に際し、当教育委員会の名において調査をすすめることとなり、栗田先生にお願いし、町の便利組合の皆様のボランティア精神にお縋りして、寒風の中での発掘調査を実施いたしました。

わが郷土の遠い昔の先人たちが、どんな文化を持っていたのか……。どんな生活をしていたのか……。当時の山野はどんな状態だったのか……。近くに、或いは遠くに住む人達と、どんな交流があったのか……。そして現在に至る経緯はどのようなのか……。

いま、豊かな時代に生きる私共の、当然な、しかも重要な責務として、このことを調査し、記録し、保存して子々孫々に伝えなくてはならないと考え、ここに、この冊子を作成した次第です。

どうか、この冊子が後世この小笠町に住む人々に読みつがれますよう祈念し、併せて発掘調査に関係された各位に御礼を申し上げて序文といたします。

平成2年4月

小笠町教育委員会 教育長 赤堀英夫

例 言

1. 本書は1989年12月1日から1990年6月15日にかけて実施した小笠町川上地内に所在する、宮ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査主体は次の通りである。
調査主体；小笠町教育委員会教育長、赤堀英夫
調査員；栗田有城、山口三夫、竹内英俊、塚本正敏
事務局；山下 力、曾根 敏、相沢美津子、木全澄江
作業員；塚本善作、佐藤てる子、赤堀きくえ、村松たち、漢人ふみ、佐藤しげ、
塚本としえ、赤堀あき、小沢しずえ、望月さだえ、斎能とよ、森下きみえ、
山田しま、江川ふくよ、山田きみ、小沢たけ、河原崎よし、井藤ふみ子、
妻木いさ子
3. 報告書に関する一切を、栗田有城が行ったが、I「発掘調査による過程」は、教委事務局長山下 力が執筆した。
4. 調査完了後、資料は教育委員会が保管している。
5. 本書の執筆に当たり、次の文献を参考にして一部を引用している。
 - ① 市原寿文 1979 清ヶ谷古窯跡群白山窯跡 大須賀町教育委員会
 - ② 渡辺康弘 1985 二ノ谷古窯跡 小笠町教育委員会
 - ③ 愛知県教育委員会 1985 愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅳ)
 - ④ 愛知県教育委員会 1988 愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅵ)
 - ⑤ 瀬戸市史編纂委員会 1981 瀬戸市史陶磁史篇二
 - ⑥ 澄田正一 1977「元屋敷遺跡」新編 一宮市史 資料編二 一宮市史編さん室
 - ⑦ 後藤健一 1984 青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書 静岡県湖西市教育委員会
 - ⑧ 中野晴久 1983 知多古窯址群における山茶碗の研究, 常滑市民俗史料館研究紀要Ⅰ
P, 11～P, 42 常滑市教育委員会
 - ⑨ 杉崎 章 1983 知多古窯の終末と常滑窯の出現, 常滑市民俗史料館研究紀要Ⅰ
P, 1～P, 9 常滑市教育委員会

目 次

I 発掘調査に至る経緯	1
図. 1 位置並びに周辺遺跡	3
II 遺跡をとりまく環境	4
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III 調査の概要	5
(1) 調査の方法	
(2) 調査の経過	
図. 2 発掘調査地点の周辺地形と発掘調査区	6
IV 調査時の現状	7
(1) 調査地点の現状	
(2) 地形と地層の概要	
図. 3 トレンチの地層断面図	9
V 検出された遺構と遺物	11
(1) A 地点	11
図. 4 A地点遺構・遺物出土状況	13
(2) B 地点	16
図. 5 B地点遺構図	17
図. 6 B地点1Gの遺物出土状況	21
〔参考資料〕 長堀遺跡出土遺物実測図	23
(3) C 地点	25
図. 7 C地点遺構・遺物出土状況	27
(4) 川上古城址	31
VI ま と め	31
図. 8 川上八幡社古城址遺構図	32

巻 末 挿 図 目 次

図. 9 A地点(1~11)、B地点(1~14)出土遺物実測図	33
図. 10 B地点(15~51)出土遺物実測図	34
図. 11 B地点(52~63)、C地点(1~13)出土遺物実測図	35
図. 12 C地点(14~61)出土遺物実測図	36

写真図版目次

図版. 1	川上古城址と調査地点の景観	37
図版. 2	A地点遺構・遺物出土状況	39
図版. 3	B地点遺構・遺物出土状況	41
図版. 4	B地点須恵系出土遺物	43
図版. 5	C地点遺構・遺物出土状況	45
図版. 6	A地点（1～12）、B地点（1～13）出土遺物	47
図版. 7	B地点（14～26）出土遺物	49
図版. 8	B地点（27～43）出土遺物	51
図版. 9	B地点（44～53）、C地点（1～22）出土遺物	53
図版. 10	C地点〔須恵質（23～37）、土師質（38～55）、鉄器（56～58）、 陶馬脚（59）、石錘（60）、砥石（61）〕出土遺物	55

I 発掘調査に至る経緯

小笠町は静岡県の中西部に位置し、東名菊川インターチェンジより、南下すること約9 km人口13,800人の町である。

時代が大きく変わろうとする昭和40年代半ば、国では米の過剰対策として、米づくり農業から、米以外の転作農業に、さらに農村にも工業を導入しようと、昭和46年6月農村地域工業導入促進法が施行された。小笠町では、昭和48年に赤土地区に農村工業導入地区の指定をうけ、純農村型から農工商の調和のとれた活力ある町づくりを目指して、企業誘致に積極的に乗り出した。

当、調査地区は、町の東寄り、小笠町川上1555～2、外46筆の8467.36㎡の土地である。この地域は、昭和35年土地改良を施工し、区画整理によって、水稻の生産向上と労力の省力化を図ったが、この一部、山添地帯に企業を誘致し、地域の活性化を図ろうと、町も積極的にその誘致に乗り出した。

まもなく、愛知県西尾市宮町260番地、金山化成株式会社から進出希望の申し出があり、その後順調に土地交渉が進み、昭和45年8月進出の決定をみて土地売買契約が成立したものである。地元住民は、待望久しかった地元進出工場に大きな期待をかけ、これを機に地域の発展と、雇用の場を確保すべく全面協力をしたものである。ところが、経済変動のうねりは当初の進出計画を大きく遅らせ、追い打ちを掛けるようにオイルショックが襲い、施工は疎か進出の見通しすら、全く立たなくなり、買収地は造成後放置されたままの状態、17年が過ぎてしまった。

この間、雑草が繁茂し付近の住民からの、苦情は絶えず、町は金山化成に対し、再々に渡り着工を促したが、はかばかしくなく、ついに転売もやむをえないとの意向がうかがえたため、町としても他の企業に転売することもやむをえないと判断し、県の指導も受けながら他企業誘致を進めて参ったところ、昭和63年4月愛知県瀬戸市共栄通り7丁目11番地、株式会社イトー急行が現地調査をし希望地に合致するので是非譲り渡されたいとの申し出があり、金山化成との合意によって進出することに決定したものである。当地域は歴史的にも由緒ある地区で、付近には5世紀頃この地方の豪族の墓と言われる、舟久保古墳（県指定文化財）があり、静岡県埋蔵文化財分布図の中にも宮ノ前遺跡として明示されており、当初から遺物の出土が予想されていたものである。

以下調査に至るまでの経過

- 昭和63年 6 月12日 小笠町土地利用委員会に、愛知県瀬戸市共栄通り7丁目11番地、株式会社イトー急行（以後、原因者と略記）から当該地に進出希望の申し出あり、委員会の会議の席上埋蔵文化財についての照会をするよう委員会として指示した。
- 昭和63年 6 月27日 原因者より埋蔵文化財の照会が教育委員会に提出された。
- 昭和63年 7 月12日 教育委員会は、静岡県埋蔵文化財分布図に示される周知の遺跡の範囲内にあることを確認し、原因者に試掘を要請した。
- 昭和63年 7 月24日 原因者は、建設用地8467.36㎡の内、約2000㎡の数カ所について試掘調査を実施した。その結果、弥生時代の遺物を確認し、調査員は本調査の必要ありと断定した。
- 昭和63年 8 月17日 町議会全員協議会で経過説明と今後の問題について慎重協議された。
- 昭和63年 9 月24日 小笠町、小笠町教育委員会、原因者、亜興開発の四者で開発、誘致、紹介、工期、負担割合等について、慎重協議された。
- 昭和63年10月 4 日 町長部局と、教育委員会は、調査員確保について協議の結果、元・岳洋中学校教諭、栗田有城氏にお願いすることに内定し、伺ったところ、快諾を得たので調査員は栗田有城氏に決定した。
- 昭和63年11月18日 原因者 株式会社イトー急行
土地所有者 金山化成株式会社
土地紹介者 小笠町、亜興開発
以上4者で経過措置、今後の対応について協定を結ぶ。
- 昭和63年11月26日 小笠町文化財保護審議会に於て経過と今後の日程等について協議した結果、12月1日から、本調査に入ることに決定し細部については、後日調査員との打合せの中で進めて行くことで承認された。
- 昭和63年12月 1 日 調査に着手

周辺遺跡地名表



凡例

	調査地点
	遺跡
	古墳
	消失古墳

No.	遺跡名	種別	備考
1	市場遺跡A地点	弥生後期	耕地整理で出土
2	市場遺跡B地点	〃	耕地整理で出土
3	市場遺跡C地点	縄文	表面採集で遺物確認
4	宮の前遺跡	弥生後～土師	耕地整理で出土、1部発掘調査済
5	榎田遺跡	〃	耕地整理で出土
6	長堀遺跡	土師	耕地整理で「こしき」出土
7	釜太夫遺跡	土師	赤土新池、丹野川改修で出土
8	赤土遺跡	弥生後期	耕地整理で出土
9	嶺田遺跡	弥生中・後期	丹野川堤防から長頸壺
10	棚草横穴古墳群	横穴	山頂部に3基
11	春日古墳	円墳	伝聞による
12	釜太夫横穴古墳群	横穴	山頂部に4基
13	宮下古墳	円墳	舌状地の先端、茶園改植で削平
14	宮下横穴古墳群	横穴	宮下池の西岸に2基
15	舟久保古墳	前方後円墳	長軸49m、圓溝並に敷石を伴う。測量調査済、県。
16	寺の谷3号墳	円墳	丘陵頂部、象形埴輪(鶏・馬)を伴う。静大発掘。
17	寺の谷2号墳	円墳	〃 茶園改植により破壊
18	寺の谷1号墳	円墳	〃 静大発掘調査
19	寺の谷横穴古墳群	横穴	山腹に26基
20	地藏堂横穴古墳群	横穴	台地末端に4基
21	虚空藏横穴古墳群	横穴	2～9号墳8基
22	〃	横穴	1号墳

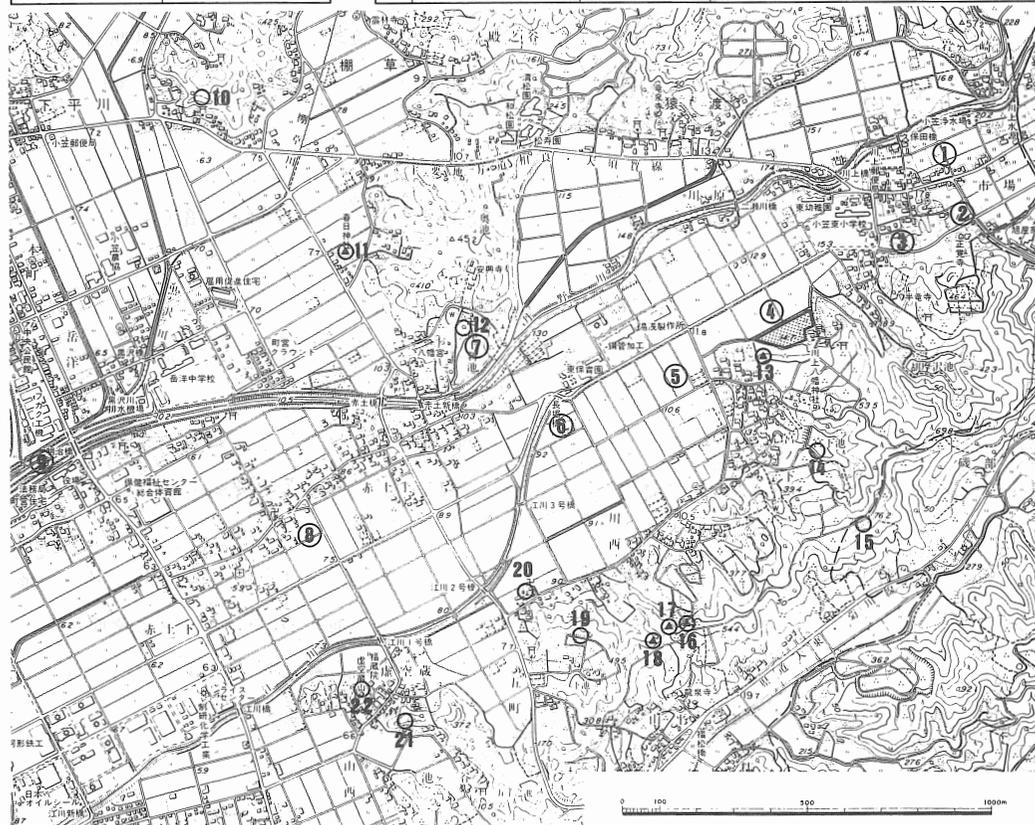


図.1 位置並びに周辺遺跡

Ⅱ 遺跡をとりまく環境

(1) 地理的環境

静岡県小笠郡小笠町は、東海道本線菊川駅から9 kmほど南に位置する。菊川と牛淵川、およびその支流によって形成された沖積平野と牧ノ原台地西半の洪積台地の一部が行政区域となる。

当遺跡はその東部に位置し、牛淵川の支流である丹野川とその支流が開析した西向きに開かれた谷の中位に位置する。背後には、大井川の残した山砂利が第三紀の凝灰岩の上に乗って丘陵が形成されており、いくつかの小河川に浸蝕されて無数の谷が刻まれ舌状地が延びている。

その谷の一つに遺跡が営まれていたのであるが、標高で見ると、牧ノ原台地から延びる丘陵の頂上が70m前後となり水田面が12m前後で、遺跡から眺める「やま」の比高は50m程度である。また、現在でも丹野川の川床が水田面とほぼ同じレベルにあるため水害を受けやすい環境にあったものと思われる。

(2) 歴史的環境

図1に調査地点と周辺の遺跡分布を示した。町内には多くの遺跡が存在し、赤土原地内の牧ノ原台地で発見された後期旧石器の細石器、弥生中期の長頸壺を出した嶺田遺跡、池村地内で天王日月銘三角縁四神四獣鏡を出した大塚古墳から代官屋敷まで、第三紀の凝灰岩に掘られた横穴古墳100余基を含め、旧石器時代から歴史時代までの150カ所程が知られている。

当遺跡の存在する町内東地区は、5世紀と推定される前方後円墳の舟久保古墳を中心とする円墳・横穴古墳と、それらに伴うと考えられる集落址が水田地帯で確認されている。図1の①②④⑤⑥⑧は耕地整理に伴って発見されたもので、遺物の量と出土状態等から判断して明らかに集落の存在を示すものであった。いずれも耕土を剥がしたレベルで遺物が現れ、土師器を主体とする遺跡で、⑥長堀遺跡では住居跡と共に台付甕と甌がセットになって採取されている。

⑦釜太夫遺跡は丹野川の河川改修に伴って土器が採取されていることと、新池の北岸の水位が下がるとその渚から土師器と土錘が採取されるので、裏山の横穴古墳との関係もあり、古墳時代の集落址の存在が判断されるものである。

また、丹野川の支流である古谷川の水源地域にあたる赤土原では、井戸掘りの排土の中から細石器を発見している。十分な調査が行われていないが、牧ノ原台地から西にのびる丘陵地帯には洪積層からの湧水が谷深く水田を開いているので、旧石器時代から縄文時代、弥生時代の遺跡を発見する可能性が高く、今後の土地開発には十分な注意を払っていく必要がある。

尚、今回の調査で「しろやま」伝承に纏わる川上古城址が確認されたが、棚草にも城山・殿之谷などの地名が残り古記録にも記されている土地柄から、古城址の存在が考えられる。あまり原地形を崩さない時期に調査が行われることを望みたい。

Ⅲ 調査の概要

(1) 調査の方法

調査の対象面積が6000m²余りと広く、生活排水と山からの湧水量が多く遺物包含層も深いことが予想されたので、まず水捌けの対策を考えた。

調査地点を東西に縦断する第1トレンチをバックホーを使って掘削したが、西側では盛土が2mもあり、用水北側の水田面より1mも下がってしまい、トレンチの壁が崩落するまで掘っても包含層を確認することは出来なかった。そこで、第1トレンチの状況と、戸長役場の古い地籍図と最近のそれとを照合し、田畑の配置を推定して2～7のトレンチを設定した。

その結果、図2にあるようなA・B・Cの3地点を選び発掘調査を行った。C地点では予想を越えて中世陶器の出土を見たので、古城址の現状確認調査も合わせて行った。

(2) 調査の経過

1988年12月1日に杭打ちを始め重機を3日間いれてトレンチを掘り、その後作業員による手作業に移ったが湧き水が激しく長靴を履いての作業ははかばかしく進まなかった。2週間ほどでようやく調査地点の見極めが立ち、トレンチの拡張を終え年内の仕事納めは28日になった。

年が明けて10日から作業を始めたが例年になく雨が多く排水作業に追われ難渋した。

それでも、1月の終わりにはA地点では柱穴と竪穴状のピット、B地点では柱穴と共におびただしい土師器を伴う溝状遺構、C地点からは古陶器・鉄器・大規模な石組み、といった遺構・遺物が検出され遺跡の輪郭がつかめるようになっていった。実質調査日数11.5日間であった。

2月には3地点の精査を進めると共にトレンチの実測を急いだ。A・B地点は4m区画、C地点は5m区画のグリッドを設定して、遺物の一部取り上げも始めた。A地点の竪穴は幅約4m、長さ約5mで長軸を南北にとり、南壁のほぼ中央部に板材が、西壁の北半部には樹皮だけを残して松の丸太が杭を押さえにして設けられていることが明らかにされた。B地点では新しい杭列が南北に連なって3条確認され、水田耕作による攪乱を受け辛うじて西半部に原地形を残していることが明らかにされた。C地点は石組に幾つかのブロックがあり1cm弱の厚みを持つ炭化物層も確認されたが、遺構を明確にとらえることは困難であった。実質調査日数10日間であった。

3月も引き続き精査を進めたが実質17日間の作業で、A地点の竪穴には青色砂土が被っていること、B地点ではV字形の溝状遺構が検出され、C地点は石組の下層が黒色粘土層であること等が明らかにされた。

4月以降は年度代わりで予算上の問題も生じたため、2～3人で実測を中心とする仕事を進め、6月15日を最終日として調査を終えた。

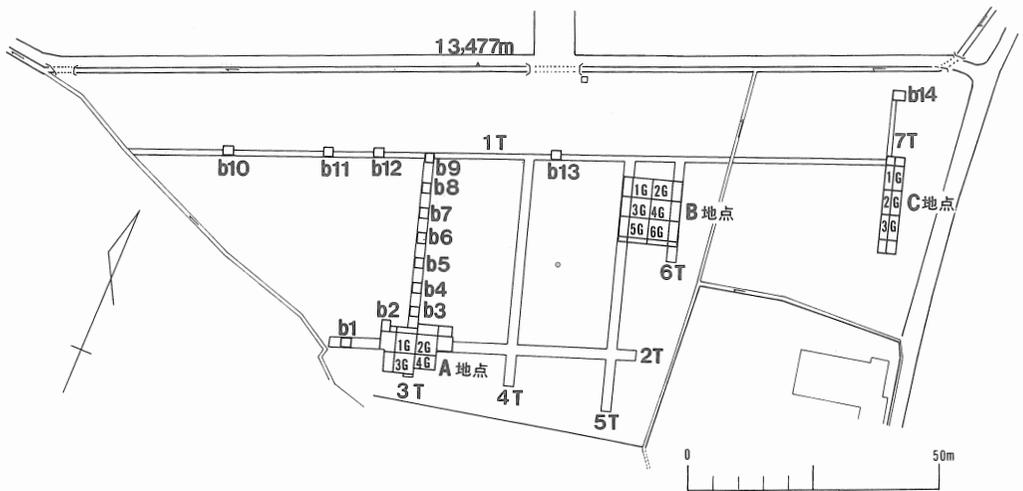


図. 2 発掘調査地点の周辺地形と発掘調査区

IV 調査時の現状

(1) 調査地点の現状

ここは大部分が水田で一部に畑が残る状態であった所に、盛土して工業用地として整備し、遊休地となっていた。周りを丘陵地に囲まれた谷底に当るが、低丘陵地は茶園に開発されているし、土地改良・大井川用水の導入・茶園の改植など、戦後の土地整備計画を2～3度繰返し、現在では低平な景観を保っている。その推移の中で、遺物が見つかり円墳が破壊されるなどしてきた。

1) A 地点

調査地点の南西部にあって、茶園と水田の中間、いわゆる山の裾に位置する白畑の西端部に当たっている。2Tの断面図(図. 3)に示されるほぼ平坦に現れる地山が、A地点(図. 4)に入ると急に下がり始め、10m移動すると1.5m落ち込むという変化を示している。淵があったといわれる場所でもあり、黒褐色土層が陸化するのとは中世以降のことと想像される。

2) B 地点

調査地点の中央部やや東寄りにあって、戸長役場の絵地図では田になっているが、その後は畑に地目変更された所である。元来この地点は高みになっていて、谷の流水が二手に別れていたものと推定できるように、調査時の排水路も東西に分かれて流れていた。また、調査の結果からも、地山が高いレベルにあることが確認できた。

3) C 地点

調査地点の東端部にあって、古くから「しろやま」と言われてきた低丘陵の裾に道路を隔てて作られた細長い畑である。字地名を「しゃごじ」と言い「三口神」の漢字が与えられている。また、古い絵地図のことで水路との関係が明白でないので、次に考えられる字地名は「久保海戸」となる。「三口神」とれば「塞の神」の伝承に合致して、境界または忌みの場を意味することになる。「海戸」とれば、菊川流域の標高5mまではおそくまで湖沼であったとする説もあって、当地は現在でも水田面が標高10m内外という状態から領けるところである。

4) 古城址

図2の地形図にある宮下・胡摩沢池の中間にある山の背が、急峻でいわゆる一騎駆けになっているのが分かる。川上八幡神社の東側の谷は茶園整備で東西の山を削って埋め立てられ、なだらかなスロープになっているが元来は深い谷で「代の谷」と呼ばれていた。今日「城山」と呼ばれる所は調査地点東側の低丘陵だけを指すが、この周囲の字地名には「大田の谷」(追手の谷)、城山下、的場、城反堀、裏門、門前などが残っている。

(2) 地形と地層の概要

図3はトレンチ・セクションの集成図である。トレンチは1T～7T、地山の深い所は部分的に深掘りして柱状ボーリングを行いb1～b14の実測図をとったが、紙面の都合で各地点の平面図と抱き合わせて示しているところもある。それらを総合して判断すると、調査地点は代の谷(だいのや)の谷底に当たるが、B地点から北西に延びる半島のような小さな尾根か扇状地形があって、その西側は深く抉り取られていたものと想像される。「昔は淵になっていたそうだ」という古老の話がそれを裏付けている。また、東側も昔からの水田で深田であったと言う。実測図で見ても、地山が厚い黒色粘土や青色砂土層に覆われていることがそのことを示している。また、青色砂土層は1層ではなく、場所によって2～3層重なって現れている。更に、河川改修の知見によると、低地の地層は1m程度の黄褐色土層を表層として、その下は黒色粘土が1～2m堆積していて沼沢地であったことを示している。町内の水田地帯は地下1m以上になると、自然堤防が形成されない限り人が住める状態になっていなかったことが判る。

これらのことを静岡教育出版社刊「静岡の地学」に見ると、牧ノ原台地のほぼ中央部の礫層の下位に『古谷泥層』一下部は粘土質、上部は砂質を帯び、中央部の厚さ12m-があるという。

その『古谷泥層』を古谷川が激しく削り、丹野川に合流して谷田と岩ヶ崎の谷間から一気に流れ出して、下流を湖沼化していったものであろう。その鼻先にある当地は洪水の度に地形の変貌を余儀無くされ、微地形と堆積層序の複雑さを増していったものであろう。

更に、洪水の記録が明らかになれば層序の分析に役立つところであるが管見にして資料を求めることが困難である。「おがさ風土記」、「小笠郡誌」から拾うと、出典が明らかではないが、726年(神亀3)遠州5郡に大水/1678年(延宝6)全国に大洪水/1858年(安政5)午年の洪水のほか、1498年(明応7)大地震・浜名湖が外洋とつながる、/1510年(永正7)遠州に大風・津波-今切の渡/1707年(宝永4)富士噴火・横須賀の湊塞ぐ、などが多少でも関係あるものとして挙げられる。

土層の中で黒色粘土と青色砂土の分布とその組成が、地点によって大きく変化する。黒色粘土は砂混じりで2m程度の深さに達すると崩れ始めて、危険な状態であった。また、黒いと直感されても、時間が立って水分が抜けると変化するので、黒褐色土と暗灰色粘土は堆積の時期に関係するのではなく、流水と地形の関係によるのではないかと推察された。b1を例にとっても、表層から黒土が現れる。これは当地で俗に「くろぼく」と呼ばれる泥土で、水を含んで掘り出された状態では粘土に近い感じを受けるものである。それが、地下2.2mまで徐々に変化して続くが、1.5mを境にして上層は細礫、下層は拳大の礫を含み粘性が高まる。遺物は2～3cm角を最大とする弥生・土師器の包含層が1.35～1.70mの範囲で確認される。青色砂土はきれいな空色から黒っぽい灰色まで色の変化があり、出土するレベルと堆積層の厚みが地点によって異なり、最終の堆積は近世に及ぶものと思われる。C～B地点の間は表層に当るレベルから、かなり厚く検出されるが、B地点を越えて西側に移ると黒っぽい土と混じり合ってしまう。また、部分的に深いレベルから現れる所もあり、A地点では堅穴を薄く覆っていた。

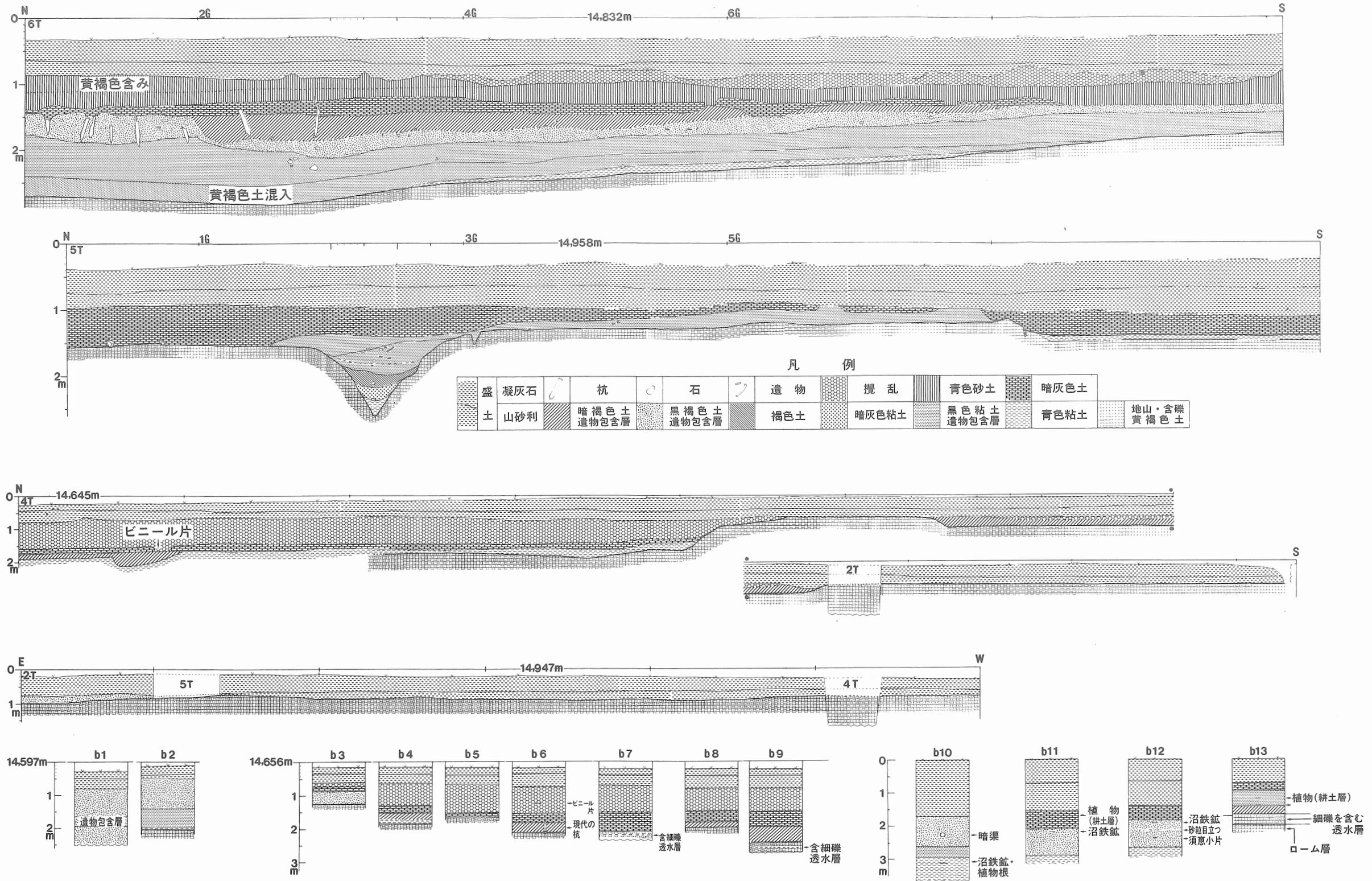


図. 3 トレンチ地層断面図

V 検出された遺構と遺物

(1) A 地点

A地点の遺構実測図は図4に、地層断面図は図3のb1/b2/b3に示し、遺構と遺物の出土状況は写真図版2に示してある。また、出土遺物については、図9-Aと写真図版6-Aに示してある。

1) 遺 構

A地点は2Tと3Tの交差する部分に検出された黒褐色土と暗灰色土を追求するための拡張区として設定したものである。

A地点東半部の遺構

はじめに、2G/4Gとその拡張区を掘り進めたが、遺物は流れ込んだものが耕作で更に傷付けられたものと判断される小破片が多く、黄褐色土の地山に至って、柱穴と石組みに被さる形で山茶碗が検出された。柱穴は上部が削り取られて10cm前後の深さを残すだけになっていた。

柱穴aは柱穴bに切られていた。柱穴aは斜線部分に焼けた樹皮を残し深さ15cm程度、柱穴bは深さ21cmあって点線部分に青白い粘土の面を残し15cm程度の太さをもつ柱が立っていたことを表していた。

柱穴c・dはともに30cm程度の深さを保っていた。また、柱穴eは石が組み込まれその検出面から35cmの深さを計ることができた。その他の穴は10cm前後の深さで残されていた。炉跡や特別なピットは検出されず、壁の立ち上がりを認めることができなかつたので、それらの柱穴の関係を定かにすることは困難であった。

また、石組みと山茶碗は柱穴を塞ぐ形で、地山から5～8cm程度浮き上がり黒褐色土に包まれていたが、その上下の土層に攪乱による変化を見定めることができなかつたので、柱穴との関わりを明確にすることが出来なかつた。

なお、地山を覆う黒褐色土層の上層から土師器・須恵器・陶器の小破片が検出され、地山に近い下層から山茶碗が出土するなど、遺物の包含層に逆転現象が見られた。

A地点西半部の遺構

つぎに、1G/3Gとその拡張区に移った。ここはトレンチの断面で見たとき、黒褐色土層を切る畑土と予想された暗灰色土層が見られたところである。その土層を追及したところ隅丸長方形で南北5.4m/東西3.8mのプランが検出された。まず、南壁中央部の杭と横に当たった板材が発見され、やがて、東壁北半部に松の丸太が、木質部は既に腐って樹皮のみが残る恰好で、横たわって発見された。掘り進めると、南壁には杭列が並び、壁の立ち上がりが確認されて堅穴の形が明

瞭になっていくが、西壁は杭列が検出されないで土壌の変化を見て、北壁は削り取られて僅かに残る杭穴から推定して、プランを確定した。東壁の北半部にあった松の木は、青色砂土層の上に乗って、堅穴よりは後世の土木施設であることが確認された。それに伴う攪乱により東壁は判然としないことが分かった。床面もじめじめした黒褐色土層となるので不明瞭であるが、西側の壁に沿った部分には踏み固められた様子が残るところもあった。中央部は僅かな遺物の出土状態から判断して確定した。柱穴、炉跡は確認できず、松葉や松の小枝が床に張り付いて検出されたので、後世の物置小屋と推定した。その時期も、青色砂土層が堆積する最終段階として中世以降と判断した。その論証は、C地点の中世遺物の上層を覆う鮮やかな青色砂土層に求めた。また、微少な遺物であるが、床面に黒天目と呉須の染付茶碗の破片を検出し、用途不明の鉄器、尖頭木器などが、中世陶器や山茶碗に白瓷、土師器を混然と含む遺物包含層の最下層から出土したことを考慮して、近世の遺構であろうと推定した。

2) 出土遺物

A地点東半部の出土遺物

図9-A-1～5、写真図版6-A-1～3が、A地点2G/4Gとその拡張部から出土した遺物である。

遺物1, 2, 3の山茶碗は図4の2/4/5の位置から、遺物1と遺物2は伏せて重なり、遺物3は破片で2箇所に分かれて検出されている。写真図版6-A-1/2が遺物1, 2に当たる。

これらの山茶碗は、回転糸切り未調整の底部に雑な調整で三角高台を貼り付けてある。体部の形態はわずかに内湾しながら外に開いて立ち上がり、口縁部をやや開き気味に丸く納めている。

歪みがあって計測部位によっては差異が生ずるが3個体とも、口径13.5～14cm/底径6.8cm/器高4～4.5cmの範囲に納まる。

色調は灰色でやや焼きが甘い感じを受け、灰釉は施されていない。2個体は復元完形で1個体は $\frac{1}{3}$ 程度の遺存率で底部と口縁の一部を残している。

これらの山茶碗は、町内では11世紀後半代とされる二ノ谷古窯跡に類を求めることができるが、法量が一致しないので直接結び付ける訳にはいかない。他には、菊川町皿山古窯跡、大須賀町清ヶ谷古窯跡群四番山窯跡の坏に類似点を見つけることができる。また、法量が異なる点に疑問を残すが、渥美の皿焼8号窯、常滑の南蛇ヶ谷2号窯の坏と形態がよく似ている。更に、大須賀町清ヶ谷古窯跡群白山窯跡のものと推定される小破片が相当量出土しているので、時期的には11世紀末から12世紀前半に位置づけられるものと判断される。

遺物4は、7cm程度の口縁部の破片で、土師器の甕の一部であるが、B地点の遺物の中に同じ物があるので、ここでは説明を省く。

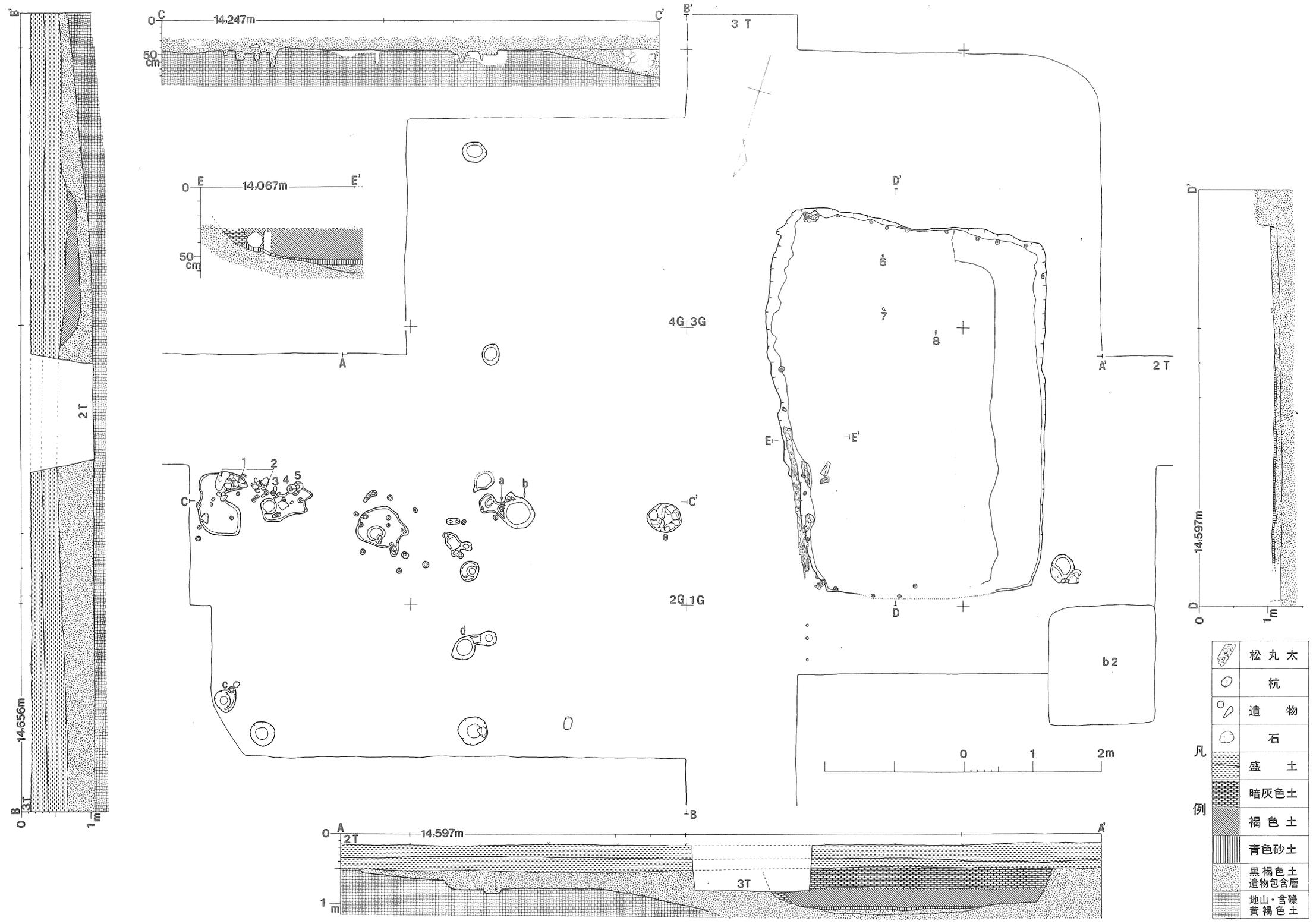


图. 4 A地点遺構・遺物出土状況

遺物5は、石錘で長軸9.8cm、短軸5.6cm、厚み2.6cmを計る。発見された位置は図4-3で無造作に置かれた石の中に混じていたものである。C地点からも石錘を発見しているが、数が少なく古墳時代には土錘を伴うことが他の遺跡で確認されているので、これは弥生時代のものと推定される。写真図版6-A-3は実測図の面の裏側から撮った写真である。

A地点西半部の出土遺物

図9-A-6~11、写真図版6-A-4~12が、A地点1G/3Gの堅穴に伴った遺物である。

遺物6、7は尖頭木器で、写真図版6-A-4/5に当たり、出土位置は図4-7/8である。ともに、長さ6.4cm、径1.6cm/1.1cmを計り、先だけが折れて残った様に見えるが、他の部分は発見できなかった。二つが一体のものかどうかは計りかねるが、両者ともに尖頭部は比較的滑らかに削られ、その根部に斜めに圧力がかかった痕跡がわずかに残る。なお遺物7には斜めに樹皮が残り、一層その観を強めている。また、材質は雑木であることが分かる。

遺物8、9は鉄器で、写真図版6-A-6/7に当たり、出土位置は図4-6である。遺物8は割れて原形を留めていないものと推定される。遺物9は長軸3.5cm、短軸2.9cm、厚み0.7cmを計り、形の崩れた楕円盤に軸状の突起を付けている。扨子加工は考えられないので、鋳物の一体造りであろうと判断される。軸状突起の様子から、元来は一体のものの軸が折れて二つに分かれて出土したものと推定される。用途は全く不明という他はない。

遺物10は卵形の扁平な石に穴が穿き、遺物11は角柱状の石片の一方に折れた痕跡を止めるものである。ともに堅穴を埋めた褐色土の中から検出され、石材は砂岩である。写真図版6-A-8/9にあるように、遺物10の穴の一方に加工の跡の様なものを残し、錘としての用途も考えられ、遺物11は断面が鋭角で砥石として用いられたような平滑な面をもっている。

その他の遺物としては、写真図版6-A-10に示した沈線模様の土器片、/11のタニシの蓋/12の松の小枝と樹皮、微細な陶器片が検出されている。

中でも、床面に密着して発見された遺物は、松葉に混じったタニシの蓋と、黒天目の陶片、白地の茶碗に藍呉須で、細く湾曲した線を描き3mm程度の円形模様を添わせた、草花の図柄を想像させる染付茶碗の破片である。

染付茶碗を有田焼と捉えるならば、年代的には17世紀を溯ることは出来ないであろうし、また、松葉やタニシの蓋のような微細な動植物が、地中に形を止めていられる期間は限られるものと判断し、これらの遺物の年代を近世以降の、それもあまり古くない時代と推定した。

(2) B 地点

B地点の遺構実測図は図5に、地層断面図は図3の6 T / 5 Tが、それに当たるものとして示してある。また、1 Gに限って遺物出土状況の実測図を、図6として別に示してある。それらの出土状況は写真図版3 / 4 (須恵系出土遺物)に、出土遺物については、図9-B / 10 / 11-Bと写真図版6-B / 7 / 8 / 9-Bに示してある。

1) 遺 構

B地点は、5 Tに土器溜まりが検出され、6 Tに杭列と暗褐色土の遺物包含層が認められたので、その間の盛土を排除して設定した。

遺物の包含層に達すると、西半部では黄褐色土の地山が表れ、土師器の高坏が目についた。また、東半部ではべたべたした黒い土の中に、土師器、須恵器、中世陶器、石斧が入り交じって、ほぼ同じレベルから出土した。この層は、(図3-6 T、黒褐色土層)盛土を含めて地下1.4m、標高13.3mとなり、ほぼ自然面を保っていると思われる用水北側の水田面が、標高13m前後であるから、ある時代の氾濫原として捉えることができよう。また、杭列が5 T・6 Tの壁と中軸線に沿って、南北に三列並んで検出された。更に、その上に後世の小さな溝と野溜めが重なるといった状況で、はじめは、大変不可解な遺跡という印象を受けた。

調査区の西端と南端は、水田と近年の耕地整理に伴う水路と農道によって削られ、東半部は元来の低地で、地山がスロープになって下がり、水田が営まれていたものであろう。北端は大井川用水まで5~6mあったが、1 Tを設定して排水路としていたこともあって、拡張を断念した。

新しい遺構

図5に於いて破線で表現した、ピットa・b、3 Gの端まで斜めに走る溝cは、新しいものと判断した。ピットaは黄褐色土の地山を掘り、北・西壁の一部に石組が残り、その石の間から須恵器の破片を検出した。綺麗な水が湧き、半日程度で一杯になった。溝cは、ピットaと連なりわずかに痕跡を止める程度の小規模のもので、遺物は出ていない。ピットbは図6の断面図にあるように、V字形溝状遺構の土師器を縦に鋭く切って掘られていた。ピットの中には、藁の繊維に木の葉と樹皮が混じり、3段4層の船底状に青色砂土が堆積していた。

V字形溝状遺構

1 Gの主要部分は、黄褐色土の地山に刻まれた、V字形溝状遺構である。幅、約1.8m、深さ、95~120cm、東に向いて流れ、溝の上半部に遺物を包含していた。遺物は、1 G東半部から2 G西半部の黒色粘土層に集中して検出された。

柱穴nは、地山の表面から34cmの深さもち、対岸の柱穴は11cmと浅く、疑問を残すが、水門の施設を考えると良いような位置に検出されている。溝の堆積状態が断面図A-A'、並びに図



图. 5 B地点遺構図

6-B-B'のように、4層に分かれたものが、溝を外れると、D-D'のように層序が渾然として、褐色土が上下の土と混じり合ったような色合いを示す。

柱 穴

3G・5Gは高みになっていて、多くの柱穴が検出された。遺物は少なかったが、3Gと5Tが接する所に、高坏の破片が並べたように発見されている。

約半数の柱穴は、地山の肩からの深さが約20cm前後であった。特に深いもの、特徴のあるものを挙げると、次の通りである。

柱穴f……深さ40cm、木片が残る。深さ21cmの古い柱穴を切っていた。／柱穴g……深さ40cm 須恵、土師器片を底で検出。／柱穴h……深さ32cm／柱穴i……深さ37cm／柱穴j……深さ32cm／柱穴l……深さ38cm、須恵器片を伴う。／柱穴m……深さ36cm／5T-柱穴k……深さ38cm／6G-柱穴d……深さ20cm、長さ16cmの柱の残欠を伴う。／柱穴e……深さ29cm

ここも残されたものは柱穴のみで、炉跡と壁の発見は無かった。A地点の柱穴と併せて考えたとき、竪穴住居跡以外の施設を検討することが必要なのかもしれないが、溝状遺構の関係もあって、古墳時代の集落跡と考えたい。そこで、支えの杭穴を伴う柱穴と、ストレートに掘られた柱穴とに分けて見たとき、柱穴e・fとそれに対応する柱穴で、新旧2軒の住居、柱穴g・k・lと3Gと5Tの境界にある柱穴で、1軒の住居が想定できよう。炉跡と壁は耕作によって削り取られたと解するのには、無理が有ろうか。あるいは、柱穴dを新しく考え、掘っ立て柱の住居を想定すれば、後者の柱穴群に須恵・土師器片を伴う点を考慮して、中世の遺構を考えることが不可能ではないとしても、確信のもてる資料が検出されていない。

沼沢池

2Gと4G・6Gの $\frac{2}{3}$ に当る面積、並びに6Tの大部分は、黒色粘土の遺物包含層まで掘って、地山までの完掘はできなかった。

2Gの中程までは、黒色粘土層の下層まで遺物が食い込んでいるが、その他の場所では、遺物が黒色粘土層の上層に止まって、流れ込みと推定される小破片のみ検出されたので、時間の制約もあって作業を中止した。

6Tの東側数mには、現在でも代ノ谷から流れ出す山水の排水路が設けられ、古くからの水田が開かれていた所で、土地改良以前には沼田であったと言われる。遺物包含層の最上層は黒褐色土層に含まれ、大小の石に混じって、完形の糸切底小皿2個、打製石斧3個、陶器片などとともに、須恵器・土師器の破片が一面に出ていた。土師器では高坏の脚台が多く目についた。西側では地山が競り上がるので、第2層の遺物は検出されないが、6Tでは、黒色粘土層に入って土師器の層が表れる。黒色粘土層の最下層には、弥生式土器も若干含まれる。写真図版4に陶質土器片のサンプルを掲示した。

2) 出土遺物

B地点からは、ミカン箱6杯ほどの遺物が採取された。そのほとんどが半欠けで、1個体纏まって検出された遺物は数少ない。割れ目も擦り減って、紋様の似通った破片を集めて復元したが、高坏と甕には接合部に疑問を残すものも含まれる。

図9-B/図10/図11-Bに示した63個の遺物の他に、小さな破片の底部を拾って換算すると、土師器の壺120/甕84/高坏33、須恵器の坏に高台がつくもの190/糸切小皿50を数えることができる。その他に、須恵器の壺20/鉢4/青磁を含む中世陶器片30などが見られる。しかし、これらの遺物は遺構に伴う遺物とは考え難く、流れ込みと判断されるので、ここでは、主としてV字形溝状遺構に伴う遺物の説明に止めたい。遺物が折り重なるように、濃密に出土したのは5Tに掛かる所、溝の出口に当る1G東半部と、2Gの3箇所であった。

図6遺物出土状況図の番号は、巻末図版と次のように対応するが、説明に用いる遺物番号は挿図の番号に従って述べていくこととする。

No.	挿 図	写真図版	No.	挿 図	写真図版	No.	挿 図	写真図版
1	10-26	7-26	2	10-47	8-38	3	9-B-2	6-B-2
4	11-B-54/55	9-B-44/45	5	10-51	8-43	6	9-B-9	6-B-10
7	10-15	7-15	8	11-B-60	9-B-60	9	9-B-13	6-B-13
10	9-B-6	6-B-6	11	10-46	8-39	12	10-21	7-21
13	10-48	8-40	14	11-B-59	9-B-49	15	9-B-3	6-B-3
16	9-B-7	9-B-7	17	10-44	8-37	18	10-41	8-34
19	10-24	7-24	20	9-B-11	6-B-8	21	10-23	7-23
22	10-27/28	8-27	23	10-40	8-33			

図6に図示した遺物は、B地点の遺物包含層としては第2層の黒色粘土層に含まれるものである。遺物の出土状態については、写真図版3に示してある。

尚、挿図と写真図版の番号は、次の通りに対応する。(挿図/写真図版)

(1/1) (2/2) (3/3) (4/4) (5/5) (6/6) (7/7) (8/11)
 (9/10) (10/14) (11/8) (12/9) (13/13) (14/12) (15/15) (16/16)
 (17/17) (18/18) (19/19) (20/20) (21/21) (22/22) (23/23) (24/24)
 (25/25) (26/26) (27. 28/27) (29/28) (31. 32/30) (33. 35/31) (36/32)
 (40/33) (41/34) (42/35) (43. 45/36) (44/37) (46/39) (47/38) (48/40)
 (49/41) (50/42) (51/43) (54/44) (55/45) (56/46) (57/47) (58/48)
 (59/49) (60/50) (61/51) (62/52) (63/53)

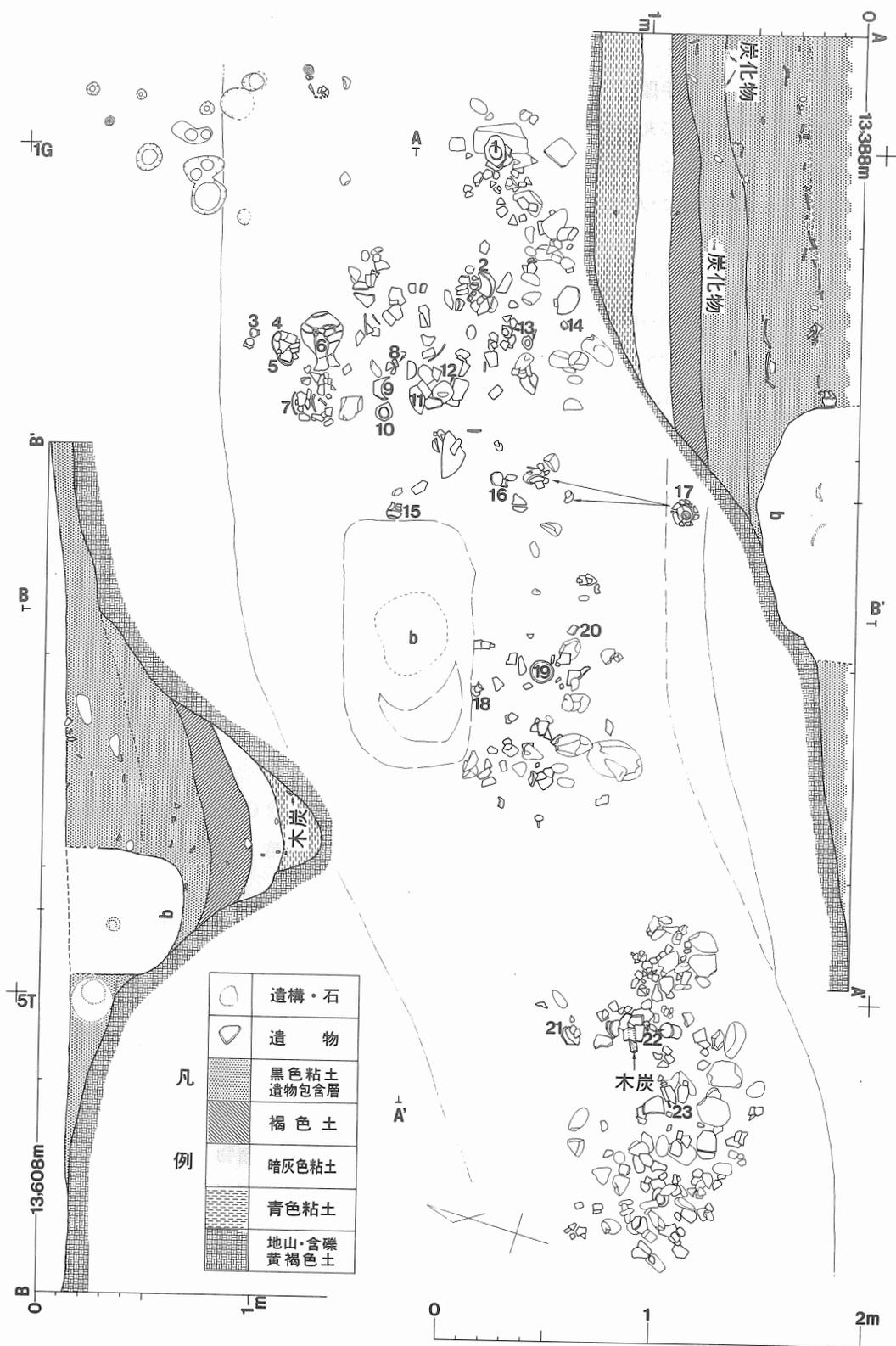


図. 6 B地点 1Gの遺物出土状況

壺形土器

遺物2～6、16、17は手捏ねの小壺である。これらの他に、底部の破片で推計すると37個体を数え、遺物16、17のように丸底が4個体、やゝ上げ底の造りが10個体あった。それらの分布は1Gに11、2Gに11、4Gに7などであった。ほとんどが底部だけを残して発見されたが、丁寧にヘラ研磨されたものが目についた。

遺物9が壺の典型であろうと思われる。ほぼ完形で、器高30cm、口径14cm、底径8.8cm、胴部最大径20.2cm、表面全体から口頸部の内面まで、丁寧に研磨してあり紋様は施されていない。胴部の膨らみが、菊川式に比べて中心部に近付き、胴部の断面が円形に近いものとなって、口縁端部は丸く納めてある。その他、口縁を面取り(遺物14,53)、やや肥厚させた(遺物11)ものも含まれる。

遺物7は、保存が悪く小さい破片の集まりであるが、底部の全面と胴・頸部の $\frac{1}{3}$ を残している。表面は溶けてみられないが、一部に研磨を推定させる部分を残す。器高13.3cm、口径7.5cm、底径7.5cm、胴部は球形に近く最大径13cmを計る。口縁部は頸部から1.2cm垂直に上がり、端部を丸く納めている。底部は焼成で反ったのか、図示できないほど微かに上げ底を呈している。胎土は細礫を含み粗い組成である。

遺物13、15は短頸壺で、刷毛目の紋様が見られ、口縁部は面取りで仕上げている。底部については、伴出していないので不明である。

遺物23、24は、丁寧に研磨を施した木の葉底である。遺物25は、2Gから出土したが丁寧に研磨して、底部の周囲に丸みを付けている。遺物22は6T出土の上げ底で、腰の立ち上がりが強い。

遺物18～21は、丸上げ底で底径2～5cmを計る。胴部を伴わないので、壺か鉢か判断し兼ねるが、19と21は1Gから、18は4G、20は5Gから出土している。

遺物10は6T出土であるが、大型で $\frac{1}{2}$ 程度を遺存し、割れ目の磨耗が激しい。復元の歪みを考慮しても、器高35.5cm、口径18.7cm、底径11.5cm、胴部は球形に近く最大径29.3cmを計る。

遺物1、8は、2Gの黒色粘土層の最下層で発見された壺である。遺物1は、腰が張ってイチジク形をした菊川式で、表面は擦り減っているが、肩部にS字状結節擬縄文を斜めに、胴部には縦の櫛目文を残している。底部は上げ底で焼きが堅い。遺物8は、ほぼ完形で器高12.7cmの小さな壺である。頸・口縁部が短く、焼きは甘くレンガ色を呈している。表面は溶けて細礫を含む胎土が現れ、判然としないが恐らく無紋であろう。腰が張って古い形を残しているとも考えられるが、土師器として扱えるものと判断する。

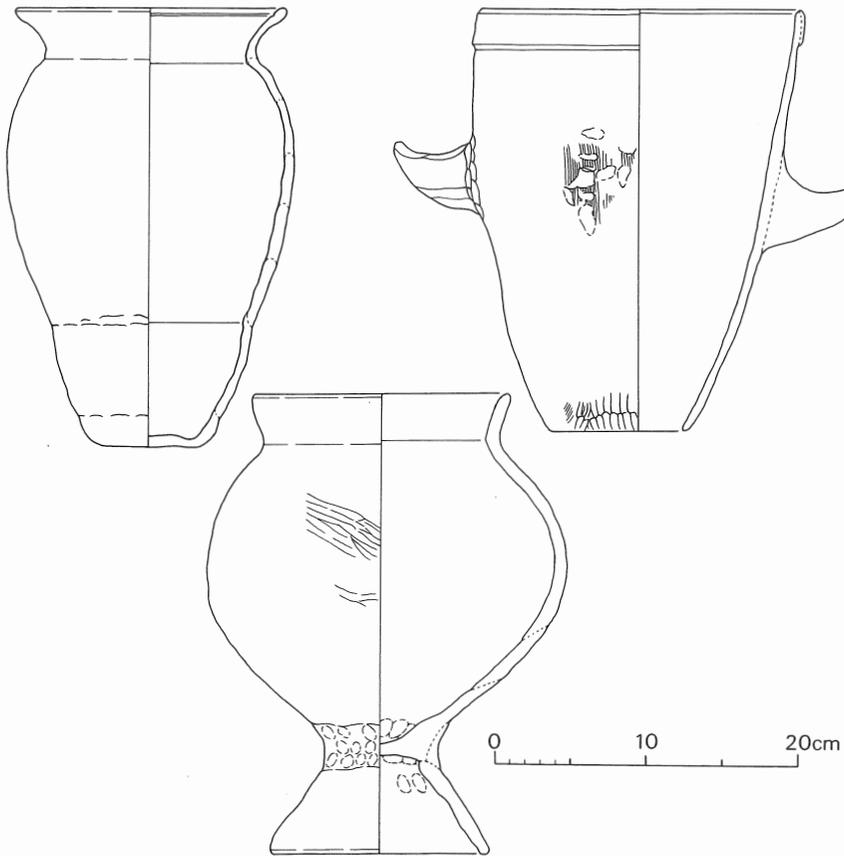
甕形土器

遺物26、27、28、29、30の甕は、遺存率が $\frac{1}{4}$ 以下と低く無理な復元を伴い、胴部と脚台は纏まって出土したものではない。遺物31～39は、大きくても5cm以下という小破片を、辛うじて実測したもので、口径などに誤差の含まれることは否めない。

ここでは、一般的な甕（26～30）、S字状口縁の甕（31～35）、古いタイプのS字状口縁の甕？（36、37）、平底の甕の口縁（38、39）が、同時に混じり合って、出土していた事実の指摘に留めたい。

尚、遺物38、39はA地点の遺物4との関連もあり、これらと同じ形態と推定される甕が、近くの長堀遺跡から出土しているので、同時代の参考資料として次に例示する。

甕は住居跡の竈に収まって出土し、底部に煤を残している。同地点に甌と台付甕を伴っていた。



〔参考資料〕長堀遺跡出土遺物実測図

器台形土器

遺物41は、口径9cm、器高8cm、脚台部基部径3.5cm・裾口径（溶けて痩せているので推定で）9.5cm、受皿部の深さ1.5cm・孔の直径1.3cmを計り、受け皿の内面は黒く吸炭させ研磨してある。

高坏形土器

遺物42～50が高坏のタイプを集約して示したものである。図示した他に、脚台部で拾うと33個体を推定できるが、穿孔したもの3、小形のもの14を含んでいる。脚台部の裾はほとんど全部が外反しているものと推定されるが、基部が太く作られ接着部の内面に幅のあるもの、細くて無垢の状態で接着されているものに二分される。遺物49、50は6T出土であるが、このように大変小さいものもある。

遺物44、48は1個体と考えられるが、他の遺物は寄せ集めであり、中でも、遺物47の上皿部はパレス・スタイルの壺としてもいいような形をしている。

脚台部の穿孔は、遺物48が4穴、他は3穴で径0.9～1.3cmの円形である。

鉢形土器

遺物51の1個体だけ検出している。手捏ねで、よく調整された表面に刷毛目が施されている。遺存率 $\frac{1}{3}$ であるが底部から口縁部まで残り、器高6.6cm、口径11cm、底径4.5cm、深さ5.8cmを計る。底部はやや上げ底で、胴部がわずかに膨らみ、口縁部は丸く納めている。

甌形土器

遺物54/55であるが、54は10cm程度の破片で確信は持てない。

石器

遺物59～63である。59/60はチャートの小形磨製石斧であり、長さ4.5cm、4.3cmを計る。61～63は一面に自然石の表面を残した打製石斧である。

その他の遺物

遺物56は土師質の高坏である。切り離しの失敗で、脚台の $\frac{1}{2}$ が変形している。遺物57、58は須恵質の小皿で、口径8.1cm、底径5cmを計る。これらは、C地点の遺物と同じものである。

以上のように、B地点の遺物は元屋敷様式に共通するものが多い。中でも、小型器台は町内で3点採取されていて、大参義一氏の鑑定によれば、4世紀後半・古墳時代の初期の遺物とされている。また小型鉢形土器は、「一宮市史」/図45-173の遺物とプロフィールが一致する。その他、高坏、S字甕などの共通点から、B地点の年代を元屋敷様式の新しい時期に位置付けたい。

(3) C 地点

C地点の遺構実測図は図7に、遺構と遺物の出土状況は写真図版5に示してある。また、出土遺物については、図11-C/12と写真図版9-C/10に示してある。

1) 遺 構

C地点は、通称「城山」と呼ばれる低丘陵舌状地に、町道を挟んで隣接する調査地点の東端に位置する。古い地籍図で見ると、山の麓に数m幅の細長い畑を挟んで、沼田に落ち込んでいく地形を想像させる所である。

7Tの掘削では、盛土の下から青色砂土層が見られたので、はじめ、調査の必要は無いものと考えていたが、排水用の小トレンチを掘っていると、陶器が発見されて拡張した調査区である。

しかし、道路に沿っていて道路拡張の計画もあり境界線がはっきりしないことから、東側への拡張は制限を受け、西側は水田の段差にぶつかって、十分な調査はできなかった。

遺構としては、石組が一面に広がっているという印象だけで、ピットとか石組のグループ分けとか納得できる分析はできなかった。

強いて挙げれば点線で囲んだ5カ所と、小刀と小皿を大量に検出した図7の6～10、12、13、14遺物群とその出土状態である。

断面図A-A'とD-D'に掛かる、細礫のブロックと石組の状態は、中に空洞があったかのようには観察されたが確証はつかめなかった。

また、部分拡大図8mに掛かる所で、厚さ1cm程度の炭化物層を認め、石組と共に、刀子並びに中世陶器と小皿を検出した。しかし、その下層は黒色粘土層で特別な変化は認められなかった。

遺物36の砥石の下が乾燥状態によって変化を見せる部分があって、とても流れるとは思えない大きい石を検出したが、黒色粘土層の中でピットは検出されず、施設の存在を考えられる状態ではなかった。

小刀と小皿の周りの石組は、比較的大きな石が広い範囲に無造作に並んでいて、遺構を証明する状態とは考えられないが、遺物をセットとしてとらえたとき、埋葬とか供養の施設として考えられないだろうか。小刀の周りに須恵質の小皿、やや離れて、推定13個の土師質小皿（カワラケ）と鉄釘に仏飯具という取り合わせを、どう判断するかが問われる所である。

柱穴は2カ所で確認されたが、道路に接近していて、調査区を拡張して追究することができずに終わっている。断面図B-B'に掛かる柱穴には、底に断面三角形になる根石が敷かれていた。

遺物の多くは、石の上に乗った感じで、比較的上層から発見されている。その分布を見ると、石組の濃密度より、むしろ、鉄器の存否に関係が深いように観察される。また、環状の配石も観察されるが、平面的な現象で、少し掘ると黒色粘土層に達して、立体的な構造をとらえることはできなかった。

C地点に於ける遺物出土状況の番号は、挿図・写真図版の番号と、次の通り対応する。

- (1) 12-23/10-23 (2) 12-22/9-c-22 (3) 12-60/10-60 (4) 12-24/10-24 (5) 12-58/10-58 (6) 12-29/10-29
(7) 12-56/10-56 (8) 12-32/10-32 (9) 12-31/10-31 (10) 12-30/10-30 (11) 12-41/10-41
(12) 12-24/10-24 (13) 12-44~50/10-44~50 (14) 12-43/10-43 (15) 12-35/10-35
(16) 11-c-6/9-c-6 (17) 11-c-5/9-c-5 (18) 12-36/10-36 (19) 11-c-1/9-c-1 (20) 12-37/10-37
(21) 11-c-2/9-c-2 (22) 12-53/10-53 (23) 11-c-8/9-c-8 (24) 11-c-9/9-c-9 (25) 11-C-13/9-C-13
(26) 12-57/10-57 (27) 12-59/10-59 (28) 12-14/9-c-14 (29) 12-15/9-c-15 (30) 12-16/9-C-16
(31) 12-17/9-c-17 (32) 12-18/9-c-18 (33) 12-39/11-39 (34) 12-19/9-c-19 (35) 12-38/10-38
(36) 12-61/10-61 (37) 12-54/10-54 (38) 12-55/10-55

2) 出土遺物

C地点に於ける、挿図と写真図版の番号は一致し、その番号が遺物番号となる。遺物1~13は陶器で、小さい破片10~12の中には印花文の青磁が含まれる。遺物14~37は須恵質の土器である。遺物38~55は土師質の土器である。遺物56~58は鉄器、59は陶馬の脚、60は石錘、61は砥石である。

遺物1、2は常滑の甕である。石組からやや離れて、同じレベルから発見されているし、焼きも似通っているので同一固体ではないかと推定される。茶褐色によく焼き締められている。大きさ15cm程度の破片であるが、口縁部は耳を垂らした後に、粘土紐を貼りつけて立ち上がりを整形した複合口縁で、口縁帯の幅は3.2cmあり耳はわずかに外反する。口縁から12cm下がって肩部に掛かる所に、径0.6cmの竹管文の中央に0.2cm角の刺突文を打つ、円形紋様が2箇所見られる。更に2cmほど下がって櫛目様の叩き文が見られる感じがするが、破片の隅になって定かではない。

これは、濁池2号窯や口縁だけを見れば正法寺山古窯の資料と一致する点が多い。

遺物3、4は下ろし目皿である。3の底部には糸切りが確認され、両者とも灰釉が施されている。これらの年代は、古瀬戸に属するものと推定される。

遺物5は瓶子の底部である。底径10.5~10.7cmの円盤を、後から胴部に貼り付けて整形した跡が覗える。灰釉が10本ほど流れ、うすみどりと灰青色を呈し裏面の全面に及んでいる。これは、種成口窯の資料に近いものと判断されるが、赤根長津1・2号窯、八床1号窯からは、瓶子に伴って遺物42と同形態の資料が呈示されているので、それにより近い年代と考えたい。

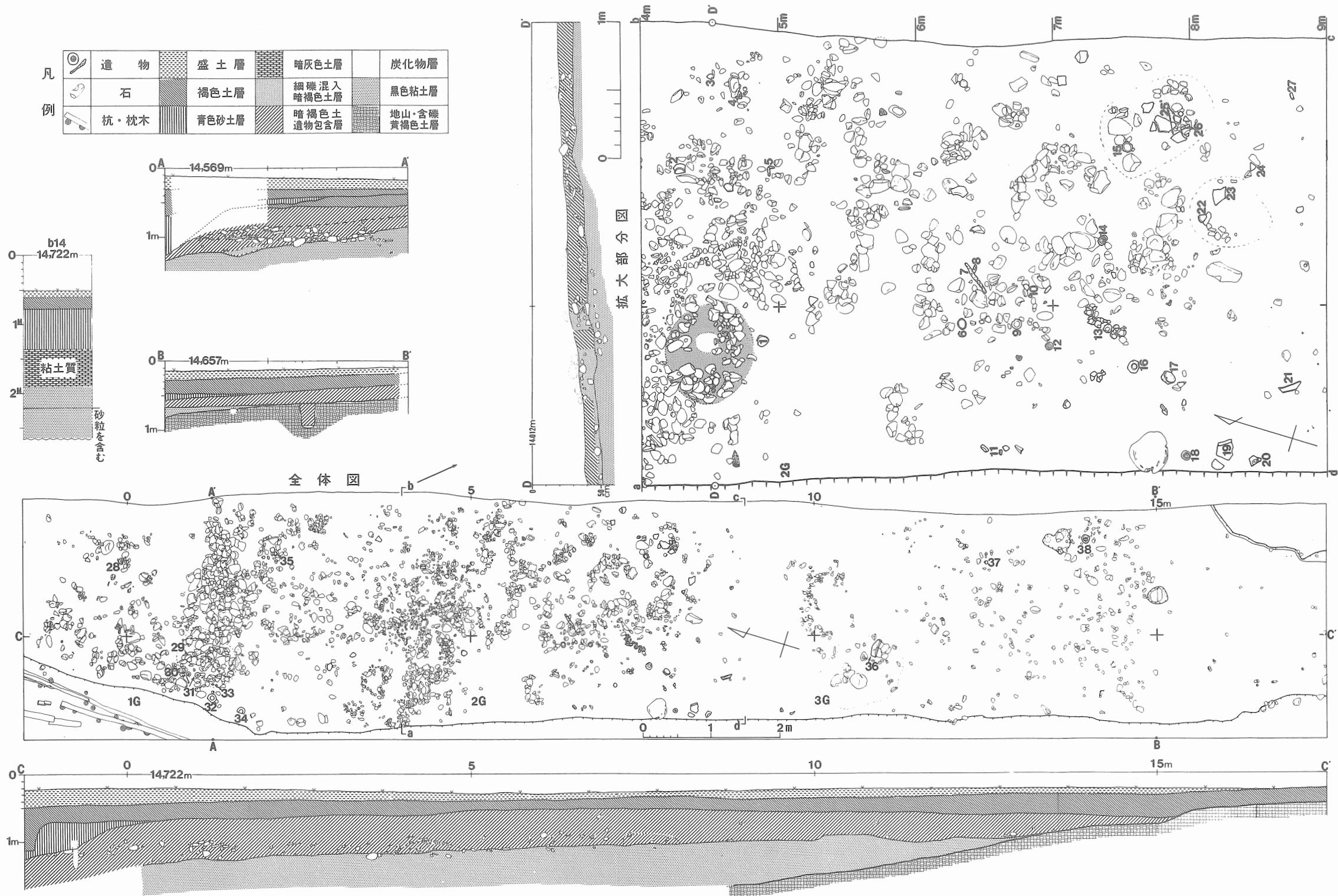


図. 7 C地点遺構・遺物出土状況

遺物6は灰釉の皿で、底部内面に径4.9cmを最大として3周する円をコンパスで描き、更にその中に、二等辺三角形に近い13弁の印花文が押されている。底部裏面には高台から中心に向かって、沈線を放射状にヘラ描きしている。年代的には古瀬戸であろう。

遺物7は羽釜である。口縁部を8cm程度残すだけで、他の資料と比較するのには躊躇するが、湖西市新古古窯の資料731に共通する形態を備えている。

遺物8、9はおそらく片口の鉢であろう。無高台で、胴部はかすかに内湾するが直線的に外に開き、口縁部は面取りのあとの調整で端部が張り出す形に納めている。焼きは甘く黄色の肌をした素焼き風の土器である。

遺物10、11、12は、写真図版9に陶磁器の小破片を集めて例示してあるが、その中の3点の実測図である。青磁の印花文なども含んでいるが、浅学のため分類できないので図示に留める。

遺物13は口縁部5cmを残す肩部の実測図である。頸を垂直に立てて肩を張る形に直す必要があるのかも知れないが、類例を見つけないのが困難である。口縁の形態は「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅳ」本多コレクション……N-5の資料に近いものではないかと判断される。

出土位置は図7-25に当たり、炭化物層の上に乗る石組の上層から、遺物58の刀子と並んで検出されている。遺物35の小皿も同じ条件で検出されているが、これはB地点の遺物57と全く同じタイプである。

遺物14~37は須恵質、遺物38~55は土師質の土器である。ほとんどが糸切り無高台で小皿が目立つ。遺物37はヘラ切りであるから壺の底部であろう。遺物20、22、34は高台が付き、底部に撫で調整が施されているが、遺物18、28は三角高台で底部が糸切り未調整である。

小刀の周りから検出された須恵質土器は、遺物29~32の4個体で硬く焼成されている。中でも、29は器高1.3cm/口径7cm/底径3.6cmで底部を意識して作られ、内面全体に自然釉が掛かっている。類例として暁1、2号窯の資料が挙げられる。その他の法量は、30……2.2/8.4/4.0、31……1.5/7.3/4.7、32……1.7/8.0/4.3と、ばらつきがある。

土師質土器は遺物43~50までであるが、図7-13の位置から検出されたものは、44~50までの7個体の他、復元できない底部を推計すれば6個体を加えることができる。これらの中で、やや大きい44、45を除くと、法量は器高1.5~2.0cm/口径7.0~7.7cm/底径3.7~4.5cmに収まり、胴部は内湾ぎみの糸切り底である。遺物44は同じ作りであるが、口径が8.5cmとやや大きい。遺物45は $\frac{1}{6}$ 程度の小さい破片であるが、底部を意図的に平底とし、口縁部も外反させている。

推計になるが、器高1.6cm／口径8.4cm／底径6.1cmを計る。遺物43も前者に等しいが、やや厚手の作りで口縁内面に爪で描かれたと思われる沈線が一周している。

遺物42は器高5.6cm／口径10.4cm／底径5.7cmを計り、土師質であるが、脚台は無垢の糸切り底である。おそらく仏飯具であろう。類例を求めると、八床1号窯に2例ある他、赤津長根1・2号窯のものに脚台部が、孫右衛門3号窯に上皿部が似ている。県内では新古古窯の727の資料と合致するものであろう。

その他、小皿で特徴のあるものは遺物24と36である。24は出土位置4で、断面図D-D'に示したプロフィールの大きな石の下になり、暗褐色土（包含層）の上層から発見された。底径4cm程度であるが、厚み4mm程度の円盤状の高台をヘラで意図的に作り出し、底部の厚さを1.1cmにした糸切り底である。36は常滑の甕と並んで検出した、器高1.2cm／口径7.4cm／底径5.0cm程度の糸切り底小皿であるが、口縁の1カ所を指で抓んで、裏から底部ぎりぎりに二つの穴を櫛でついで開けている。燈明皿にはならないので、分銅として用いたものでもあろうか。

遺物14、15、19、23は糸切り底で大型の須恵質坏である。口径は14cm以下と推定されるが、直径が計れる19は、器高3～3.5cm／口径12.3～12.5cm／底径6cm／深さ2.3cmで、碗と皿の中間的な形をしている。14は底径がやや広い感じで、胴部の立ち上がる角度が強い。

遺物18は申し訳程度の三角高台を付けた須恵質土器である。内面にお焦げと見られる炭化物を分厚く付けて検出された。出土位置は32で断面図A-A'の、落ち込みの外れに当たる所から発見された。胎土には5mm前後の細礫が練り込まれ、表面に煤は掛かっていないが、はじめから煮沸器としての用途に備えて製作された感じを受けた。

遺物38、39、40、51、55は土師質坏と皿である。溶けて消えてしまったものもあるが、いずれも、糸切り底であったことは疑いない。総じて言えることは、同じサイズの須恵質土器に比べて、大型の土師質坏は器高が高く、碗形をしているようである。

その他の土器としては、遺物59陶馬の脚がある。おそらく前の左脚であろうと推定される1本だけが検出された。

以上の陶質遺物は、類列として挙げた窯業地の推定年代を列举すれば、次の通りとなる。
湖西・新古古窯……碗・小皿の矮小化／13世紀末～14世紀前半代、
瀬戸・八床第1号窯……1260～1280年・種成口窯……13C中葉・赤津長根1・2号窯……13C後葉～14C前葉・孫右衛門3号窯……14C中葉　常滑（七曲／濁池）……1300～1350年

遺物56は、全長26cm程度の小刀である。切っ先を少し欠いているが、ほぼ完形で3個に折れている。遺物57は刀子、遺物58は鉄鏃かヤリガンナか迷うところである。この他にも用途不明の鉄片が数個発見されている。

遺物60は石錘である。遺物61は砥石で、三面に平滑な研ぎ痕を残し、長さ27cm、幅11cm、厚さ4～7cm程度の砂岩である。

(4) 川上古城址

挿図8と写真図版1に示したように、古城址の遺構の概略を掴むことができた。C地点の資料は動かぬ証拠として、雄弁にその事実を明らかにしてくれたことになる。

川上八幡神社の境内とその裏山から、俗に、「城山」と言われていた低丘陵地にかかる一帯が中世それも、南北朝前後の山城として確認されたわけである。

遺構としては、茶園整備でその大半を失ったことになるが、神社の境内に残る曲輪と竪堀は確認できるし、山頂部について本丸なのか古墳なのか調査して明らかにすれば、まだ、十分な景観を保っている。

参道を登っていくと、コンクリートの階段があって崖を登る形になるが、拝殿の前までに2段、拝殿の左右から背後にまわる段と併せて3段の曲輪が残り、拝殿から本殿へ向かう石段の右手に竪堀、本殿の広場から山頂部にかけて本丸の内曲輪がしっかり形を止めている。

VI ま と め

今回の調査の、試掘段階では弥生式の遺跡と予想されていた。しかし、掘ってみると意外な結果を生み出すことになった。旧石器時代から近世の代官屋敷まで網羅する歴史の重みを、思い知らされた観が深く、文化財保護行政を町・村負担に終わらせている現状の、打開策を深刻に考えなければならない時期に至っていると、痛切に感じた。

文化は、言わば地域と人の交流の所産であるわけだから、ひとつの遺物をとっていても、その研究、分析、保護対策を、自治体単位で処理していくのは大変である。また、開発の波は次々にその負担を拡大することにもなっている。

町内でも、大塚古墳、嶺田遺跡、あちこちの横穴古墳群を挙げるまでもなく、破壊された文化財の数は多い。文化財の周知を本来のものとして、限られた遺跡の保護に万全を尽くしていきたいものである。

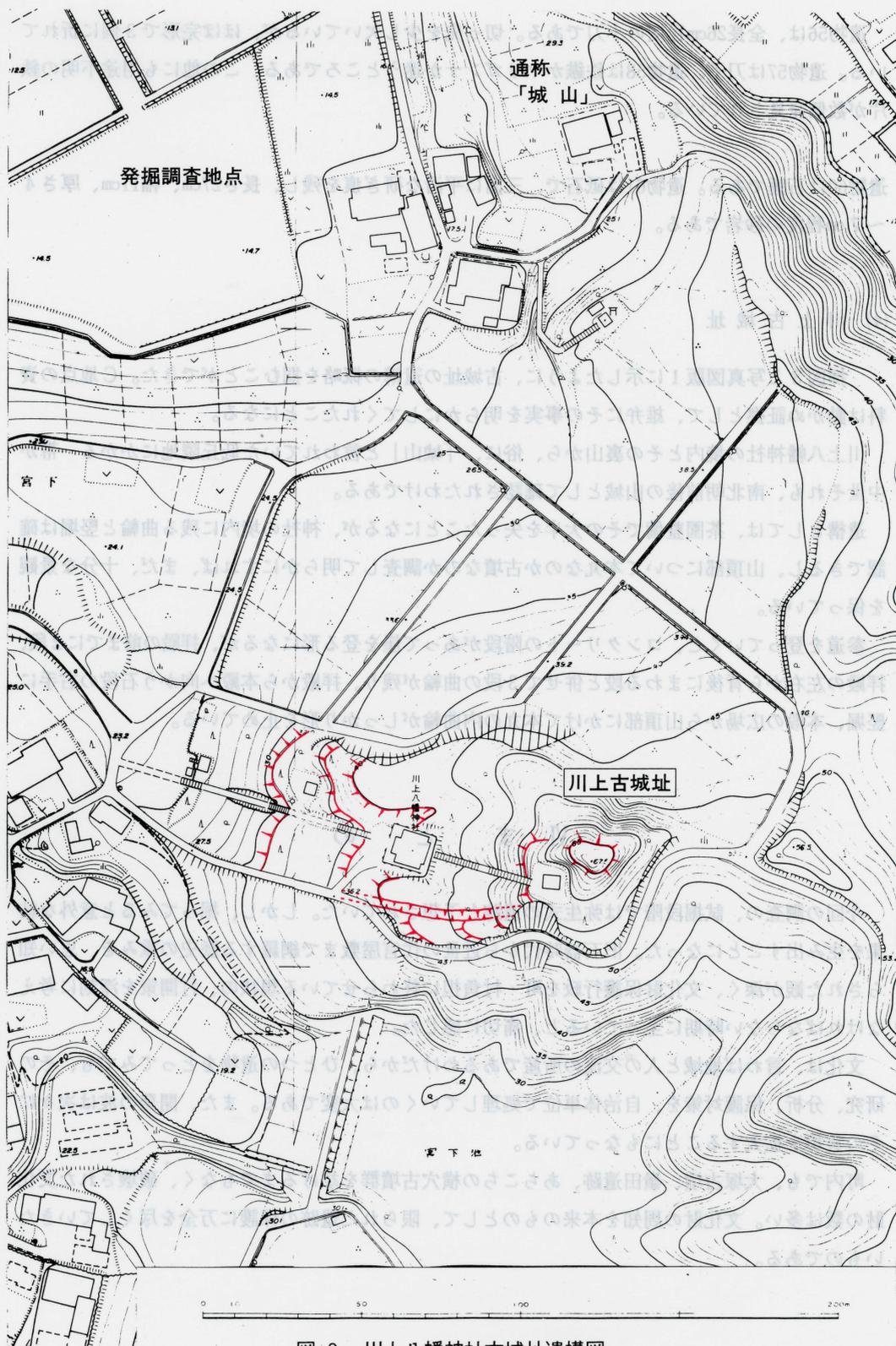


図. 8 川上八幡神社古城址遺構図

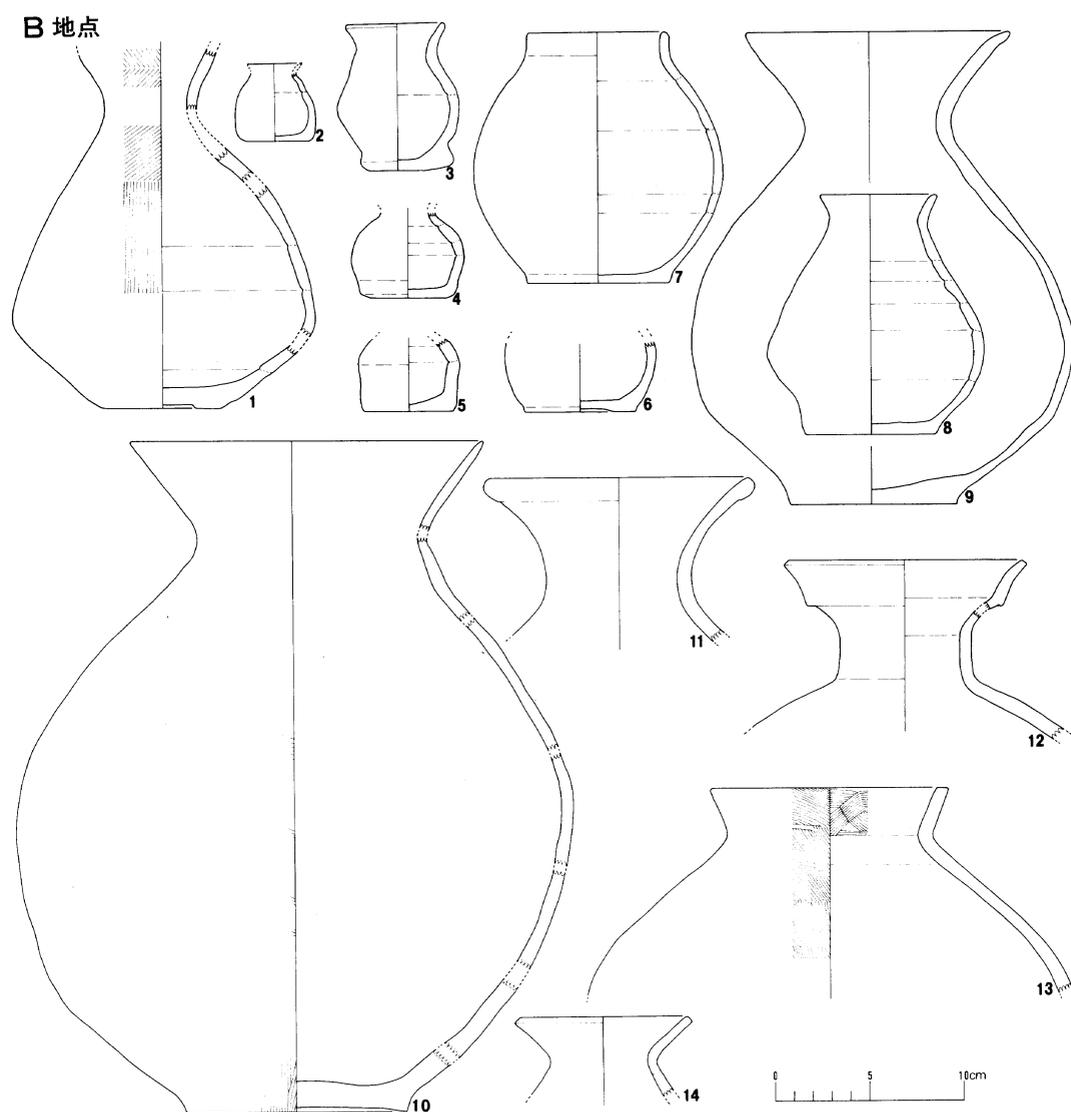
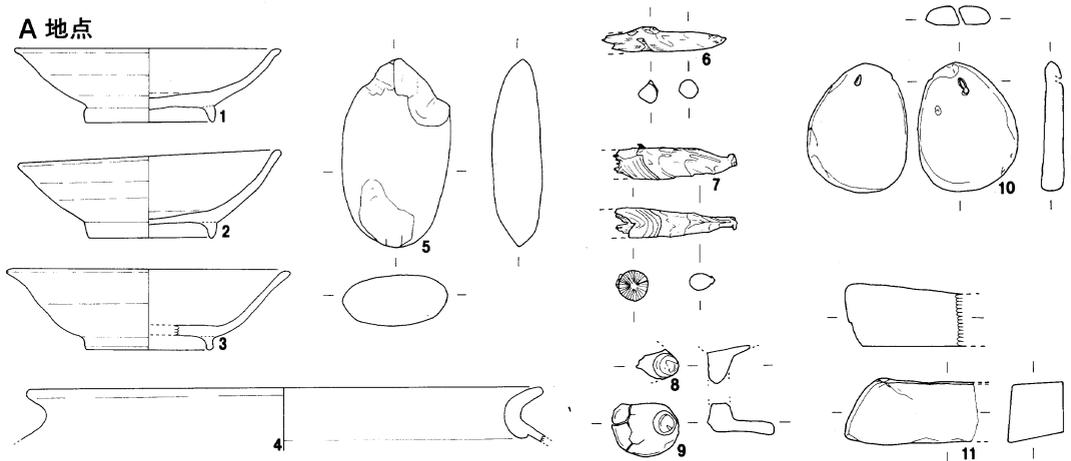


图. 9 A地点(1~11)·B地点(1~14)出土遺物実測図

B 地点

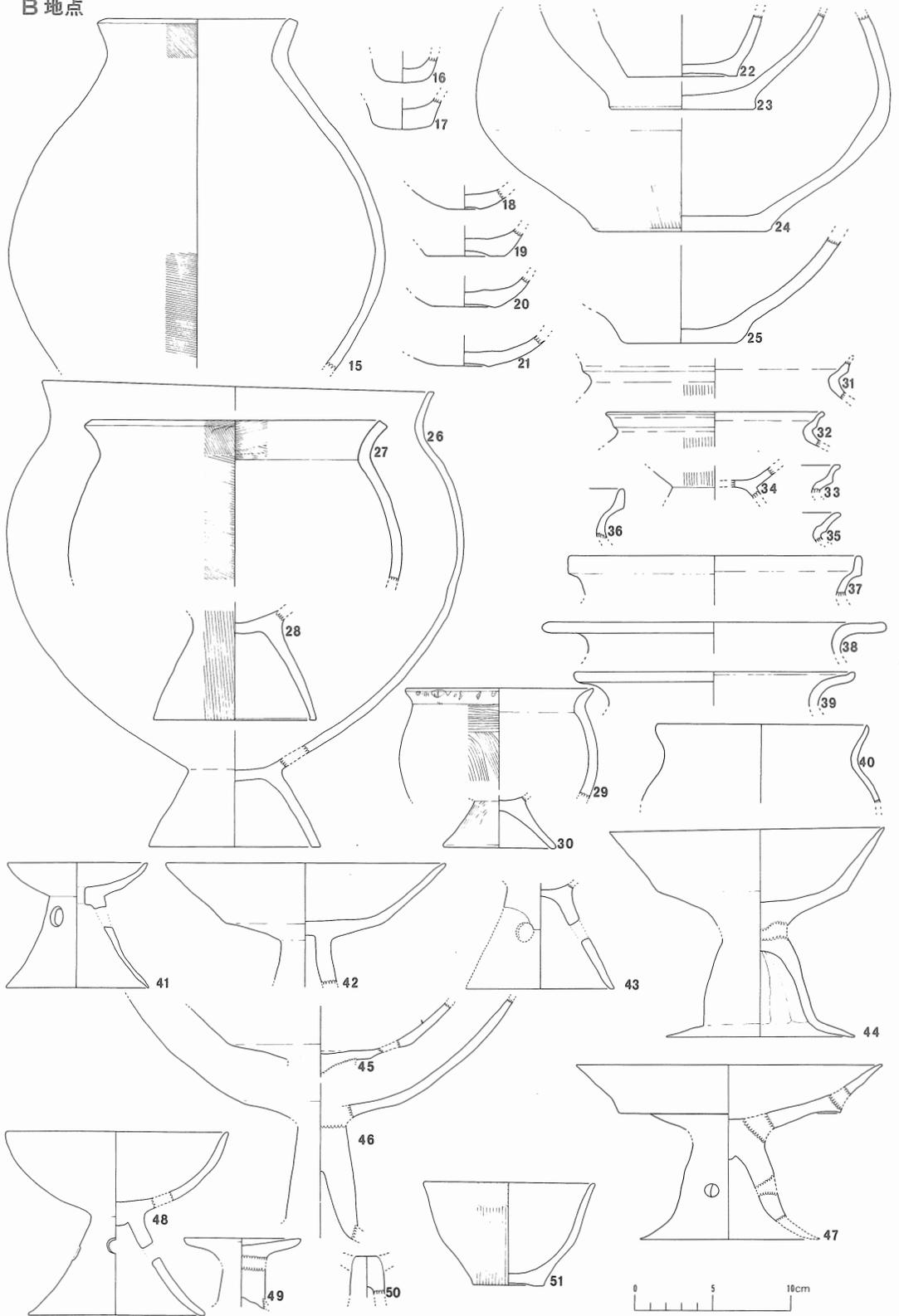
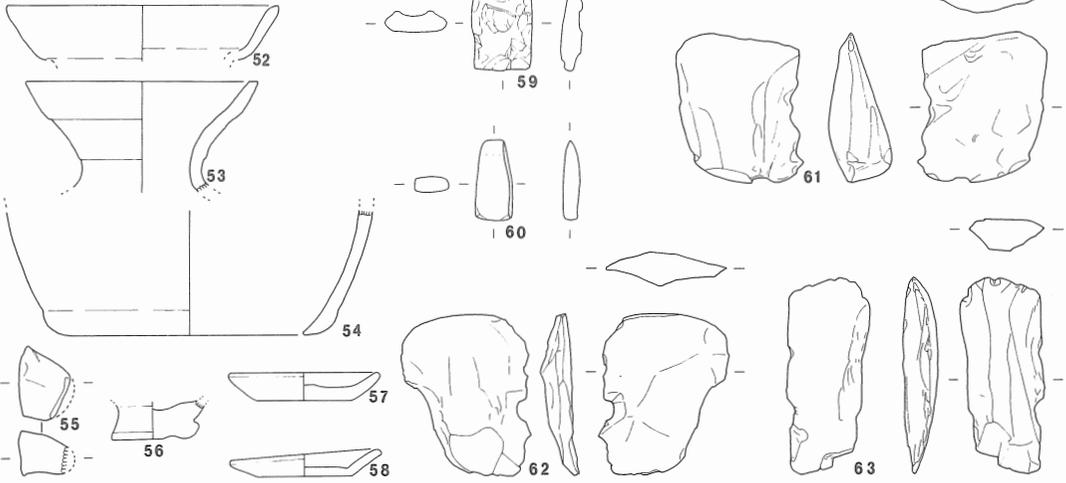


图. 10 B地点 (15~51) 出土遺物实测图

B 地点



C 地点

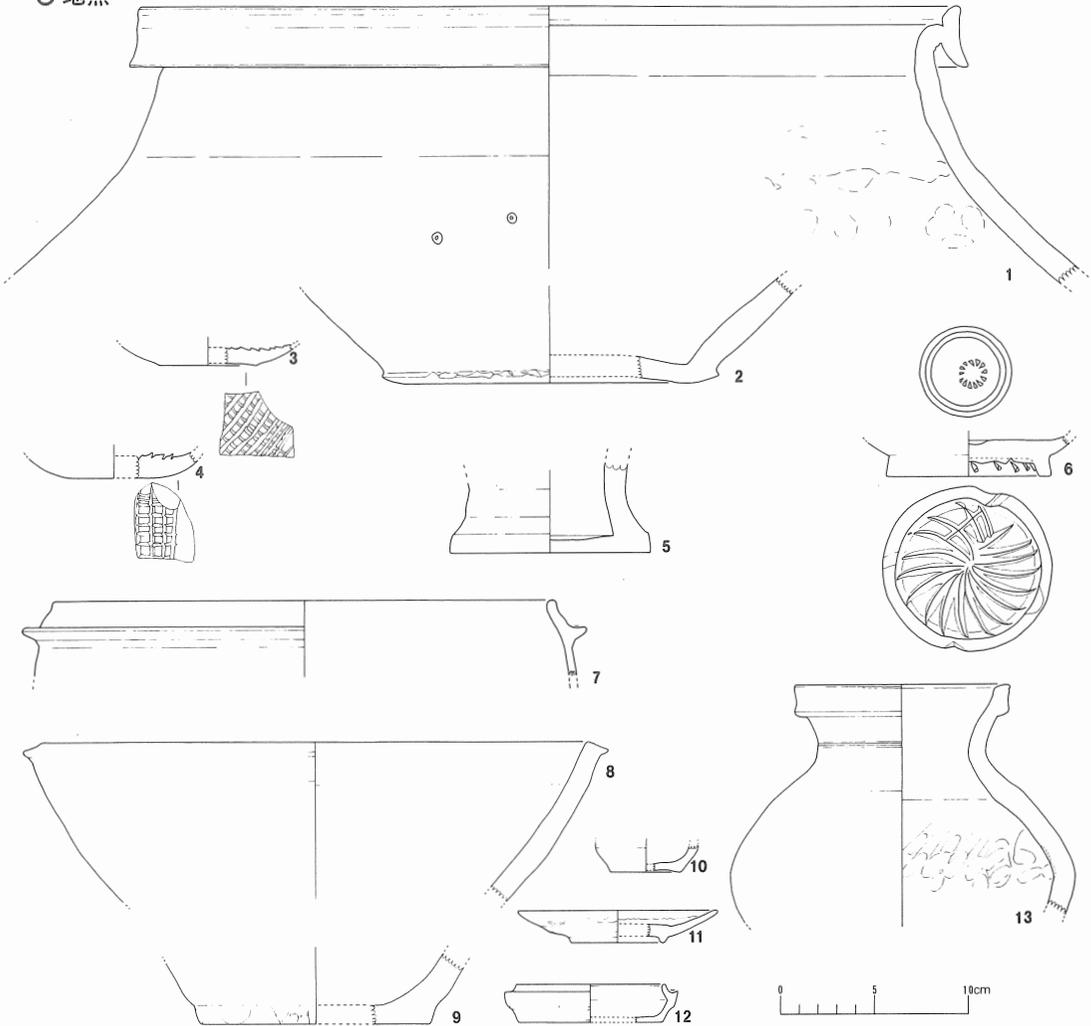


图. 11 B地点 (52~63) · C地点 (1~13) 出土遺物実測図

C 地点

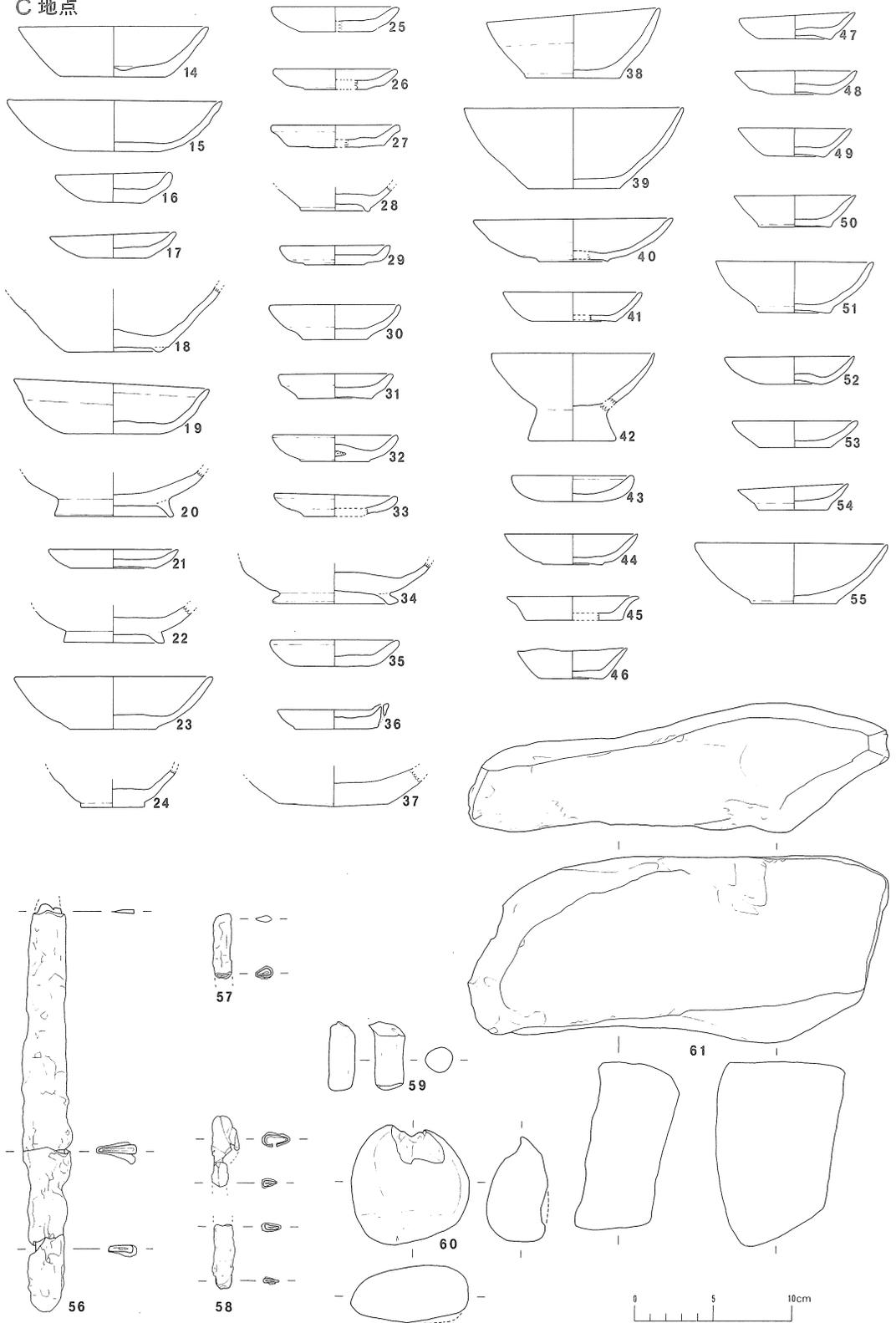


图. 12 C地点 (14~61) 出土遺物実測図

川上古城址
(川上八幡神社の遺構)



本丸? (山頂部)



東側

内
曲
輪



本殿前



豎
堀



山腹より見下ろす

下から見上げる

城山 (通称)

代の谷

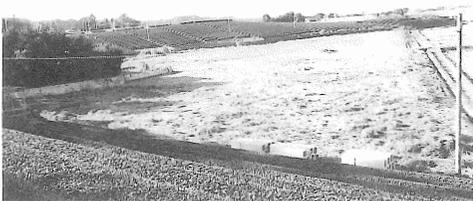
川上八幡神社



遺跡全景 (北からの眺望)

↑
発掘調査地点

宮の前古墳跡 (円墳)
←



現況



トレンチ設定状況

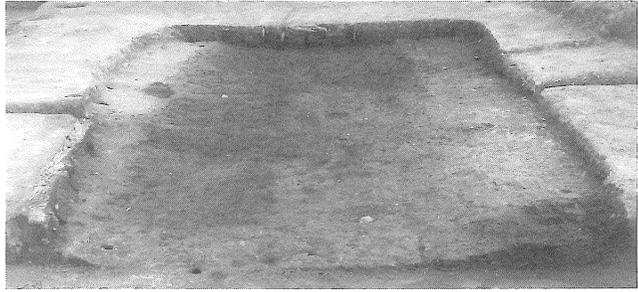
川上古城址と調査地点の景観



南東隅の柱穴



南壁の柱穴・杭・板材の配列

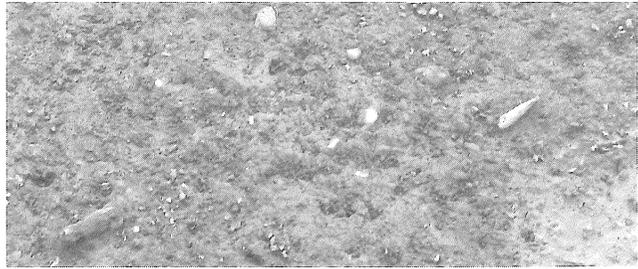


竪穴全景

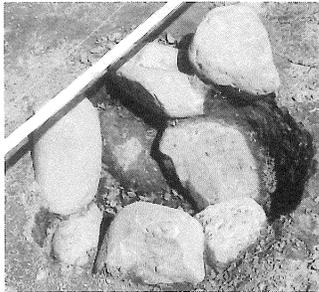


枕木の松樹皮

竪穴の出土状況



尖頭木器出土状況

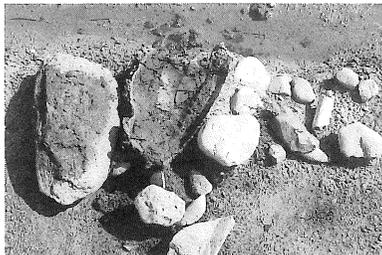


石組柱穴

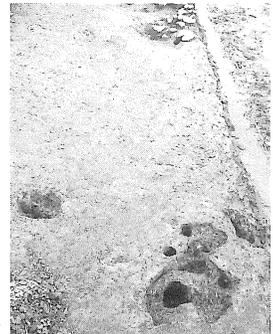


山茶碗と石の配列

大石の下から土師・山茶碗



外周炭化の柱穴 →

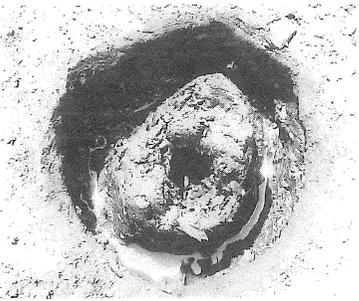


A地点遺構・遺物出土状況



V字型溝状遺構

V字型溝状遺構と柱穴面



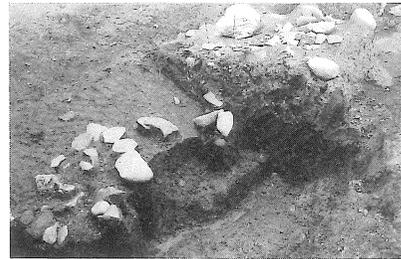
柱穴と木材残欠



溝の断面



小型壺の出土状況



溝の中・下層



細頸壺の出土状況



溝の最上層

B地点遺構・遺物出土状況

壺形土器

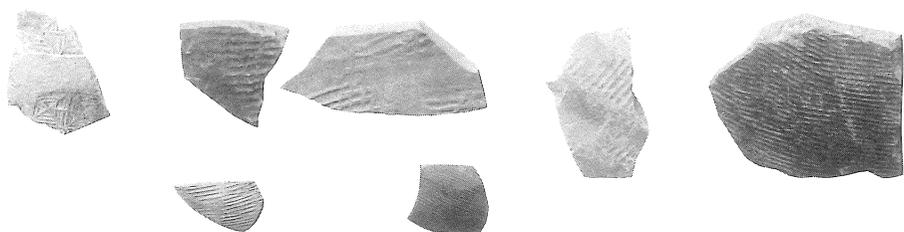
口緣部



頸肩部



胴部



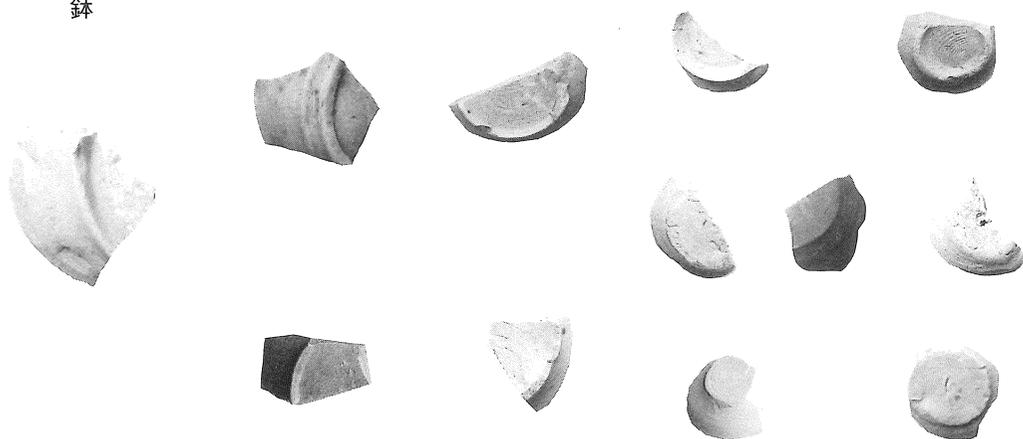
底部



中型坏

小型坏

鉢



B地点須惠系出土遺物



北側から見た全景



中世陶器出土状況



刀子と小皿の出土状況



石組の下は黒色粘土層



小皿と石の配列

刀子と石の配列



砥石の出土状況

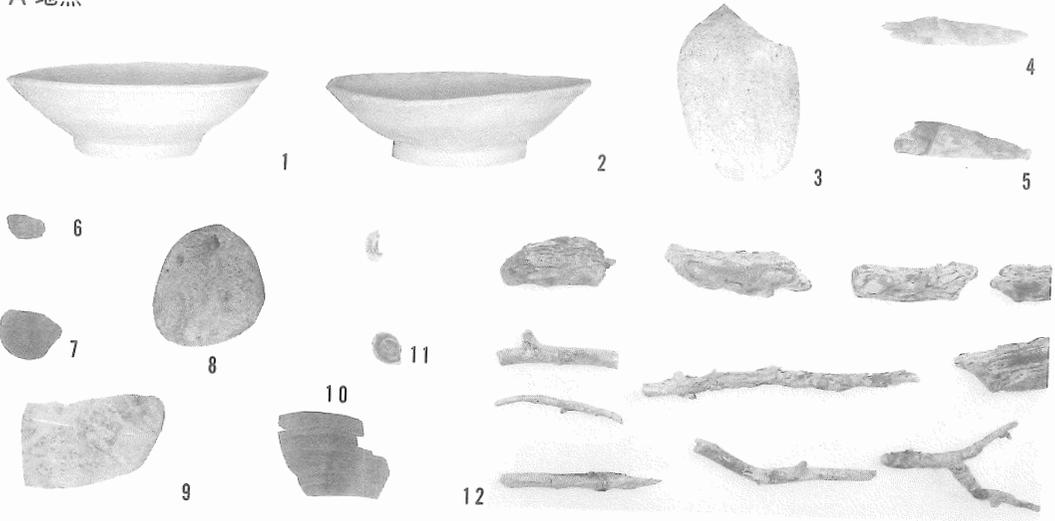


西側から見た全景

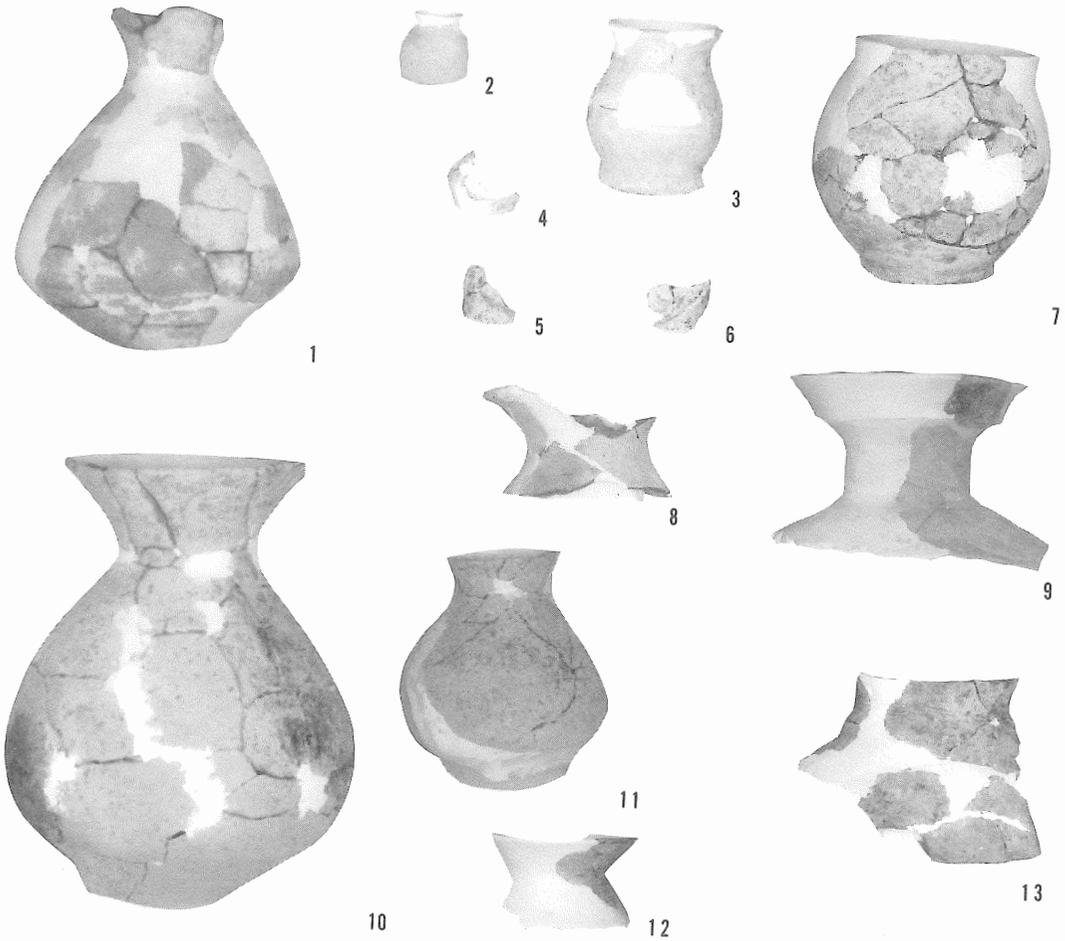


C地点遺構・遺物出土状況

A 地点



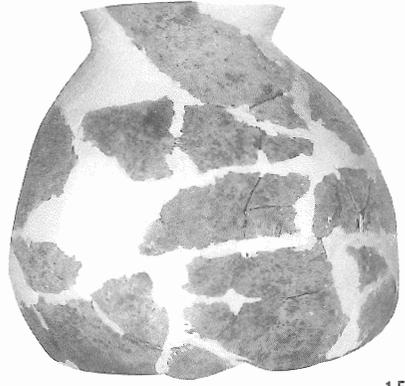
B 地点



出土遺物 A地点 (1~12)、B地点 (1~13)

B 地点

图
版
7



15



16



18



19



17



20

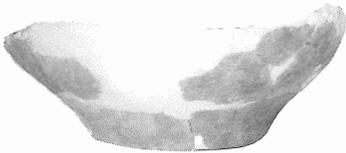


21

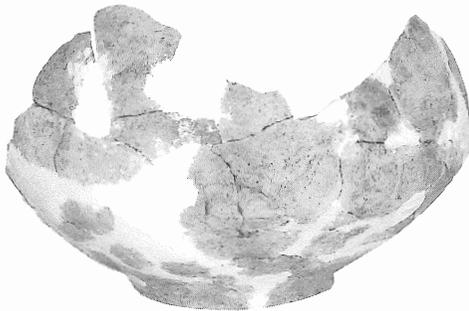
14



22



23



24



25



26

出土遺物 B 地点 (14~26)

B 地点

图版
8



27



28



29



34



30



31



32



33



35



39



36



37



40



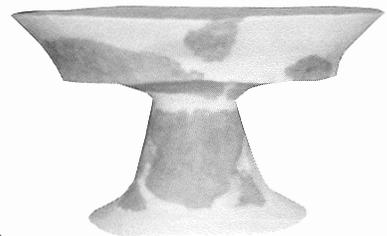
41



42



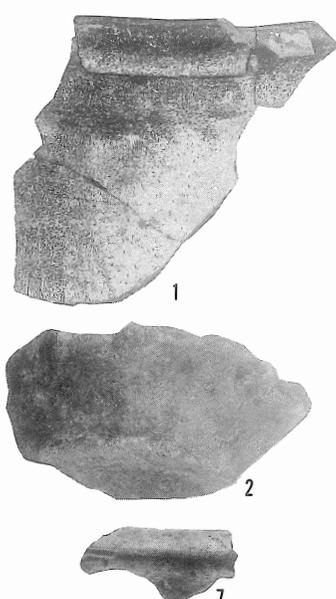
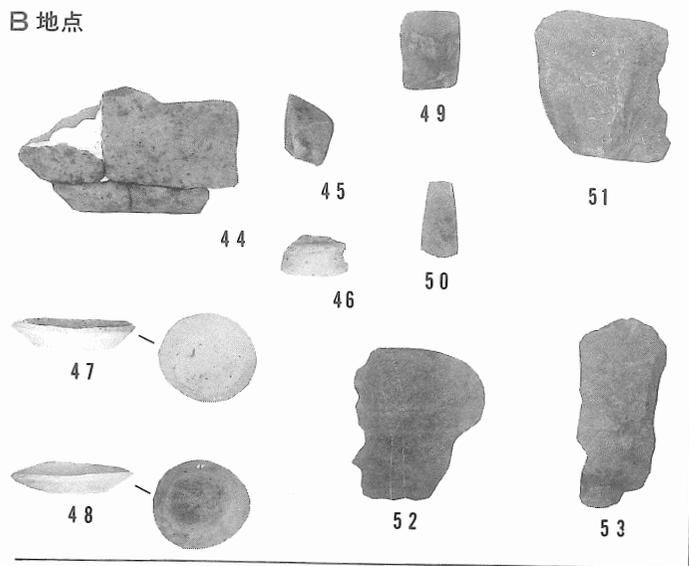
43



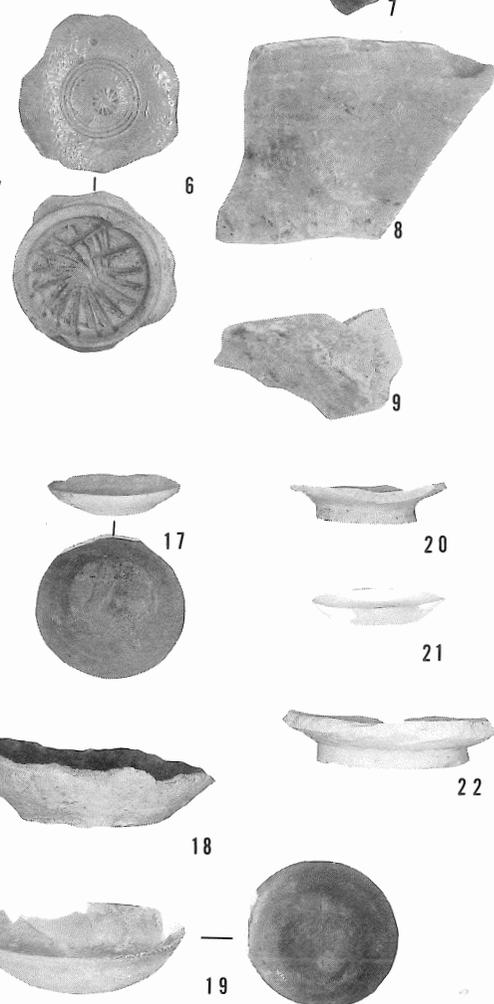
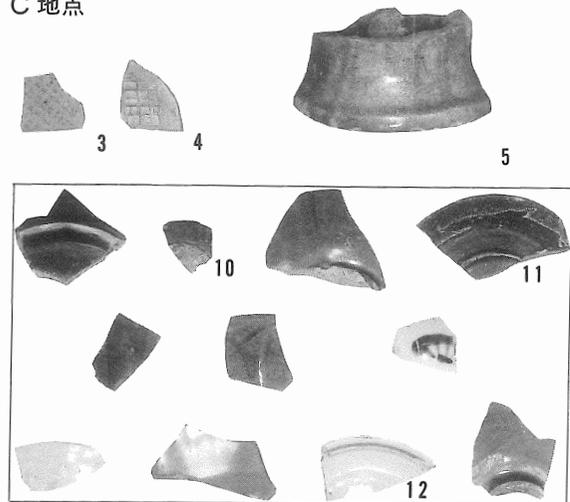
38

出土遺物 B 地点 (27~43)

B 地点

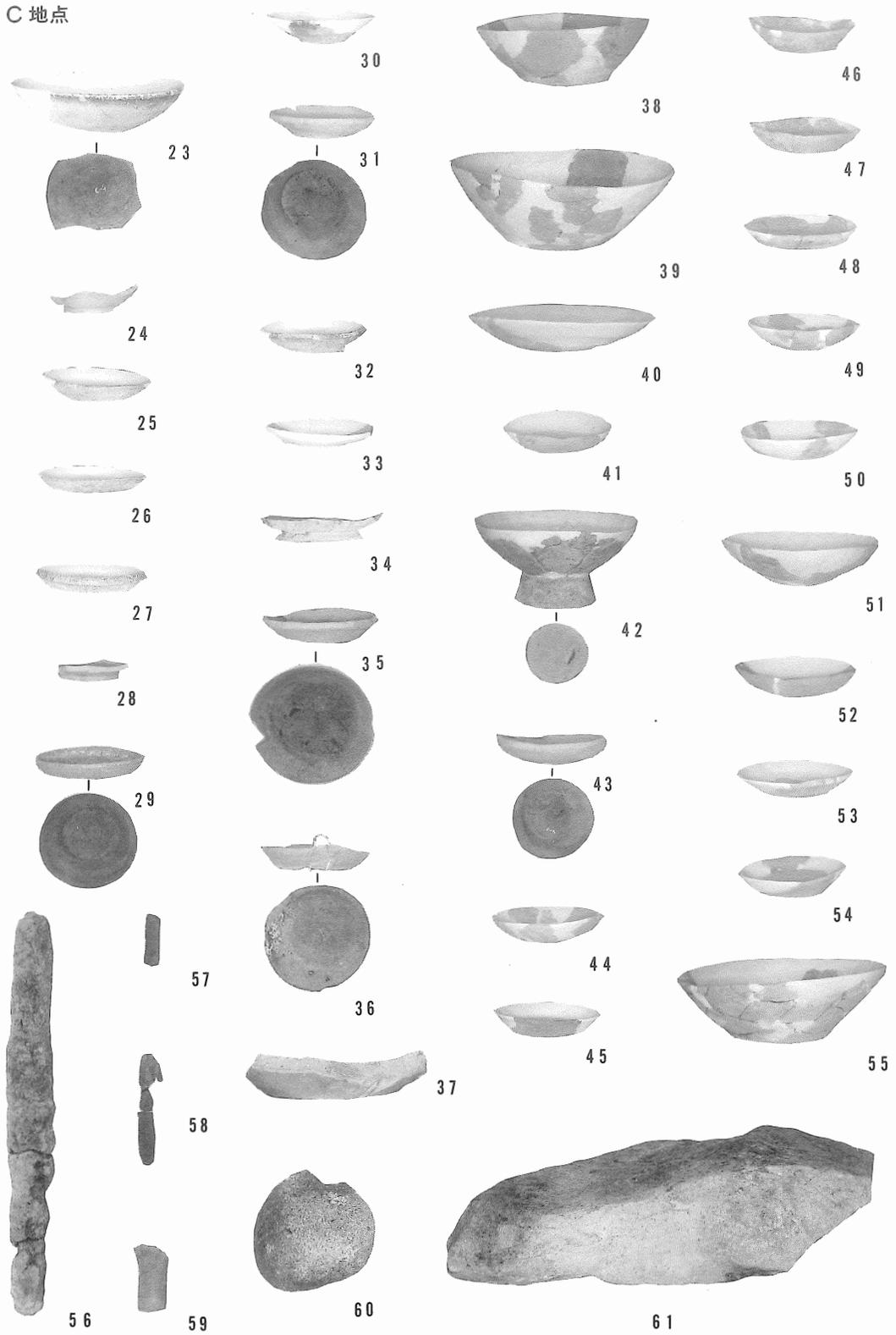


C 地点



出土遺物 B地点 (44~53)、C地点 (1~22)

C地点



出土遺物 C地点 (23~61)

須恵質(23~37)、土師質(38~55)、鉄器(56~58)、陶馬脚(59)、石錘(60)、砥石(61)

小笠町川上地内
宮ノ前遺跡発掘調査報告書

発行年月日 1990年 月 日

編集責任者 栗田有城

発行 静岡県小笠郡
小笠町教育委員会